

吉井地区遺跡群III

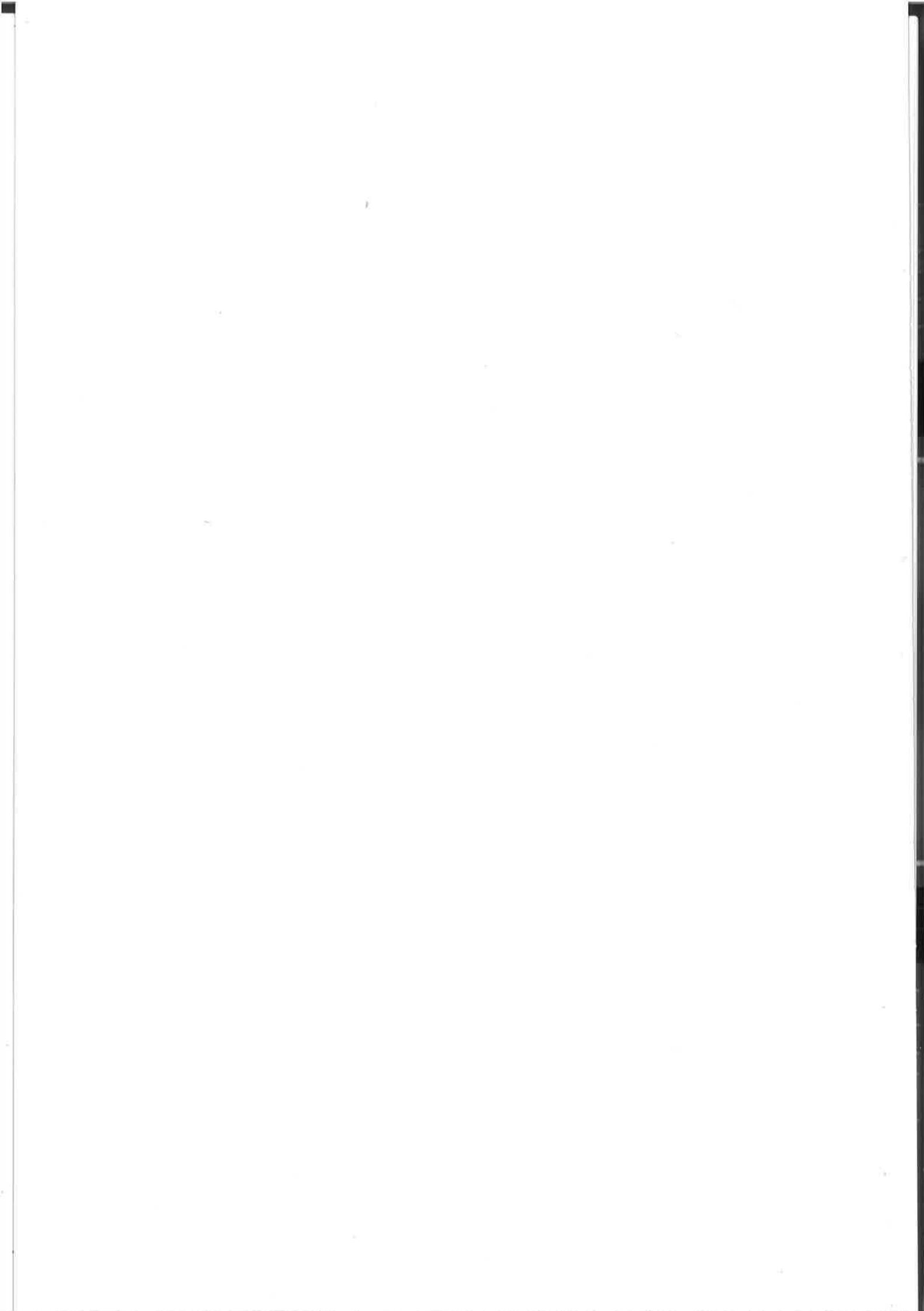
——柚木田遺跡の調査——

二丈町文化財調査報告書

第 32 集

2004

二丈町教育委員会



吉井地区遺跡群III

——柚木田遺跡の調査——

二丈町文化財調査報告書

第 32 集

2004

二丈町教育委員会

序

この報告書は、中山間地域総合整備事業福吉地区に関連して緊急調査された柚木田遺跡の発掘調査の記録の一部であります。

本書が考古学研究の一資料となり、文化財の保護と活用に広く利用されることを願います。

平成16年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 藤田孝治

例　　言

1. 本書は二丈町教育委員会が調査主体なり、平成14年度において国庫補助を受けて実施した二丈町大字吉井字柚木田に所在した柚木田遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会　主査　村上　敦が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は村上が行なった。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は村上が行なった。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の写真撮影は村上が行なった。
6. 本書に掲載した空中写真については有限会社 空中写真企画に委託した。
7. 本書に用いた方位は全て座標北である。
8. 本書の執筆編集は村上が行なった。

本　文　目　次

第1章　はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査期間	1
3. 調査体制	1
4. 遺跡周辺の歴史的環境	4
第2章　調査の概要	5
1. はじめに	5
2. 左岸地区の調査	6
3. 右岸地区の調査	15
第3章　おわりに	21

挿　図　目　次

第1図　二丈町位置図（縮尺1/200,000）	2
第2図　町内主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第3図　柚木田遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）	5
第4図　左岸地区遺構配置図（縮尺1/400）	6
第5図　1号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	7
第6図　2号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	8
第7図　5号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	8

第8図	4号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	9
第9図	6号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	10
第10図	7号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	11
第11図	8号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	11
第12図	1号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）	12
第13図	2号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）	12
第14図	1号土壙実測図（縮尺1/60）	13
第15図	2号土壙実測図（縮尺1/20）	13
第16図	左岸地区出土遺物実測図（縮尺1/3）	14
第17図	右岸地区遺構配置図（縮尺1/400）	15
第18図	9号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	16
第19図	10号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	16
第20図	3号土壙実測図（縮尺1/20）	17
第21図	4号土壙実測図（縮尺1/60）	17
第22図	溝状遺構実測図（縮尺1/150・1/30）	18
第23図	右岸地区出土遺物実測図（縮尺1/3）	20

図 版 目 次

- 図版1 遺跡上空から唐津湾方面を望む（南から）
 図版2 左岸地区全景（空中写真）
 図版3 右岸地区全景（空中写真）
 図版4 <上段>遺跡遠景 十坊山・浮嶽山麓を望む（北から）
 <下段> 1号掘立柱建物跡（南から）
 図版5 <上段> 2号掘立柱建物跡（東から）
 <下段> 5号掘立柱建物跡（東から）
 図版6 <上段> 6号掘立柱建物跡（南から）
 <下段> 7号掘立柱建物跡（南から）
 図版7 <上段> 8号掘立柱建物跡（西から）
 <下段> 9号掘立柱建物跡（東から）
 図版8 <上段> 10号掘立柱建物跡（東から）
 <下段> 1号竪穴住居跡（南から）
 図版9 <上段> 2号竪穴住居跡（北から）
 <下段> 1号土壙（東から）
 図版10 <上段> 2号土壙（西から）
 <下段> 3号土壙（西から）

図版11 <上段>SD-01土層断面（南から）

<中段>SD-01土層断面（南から）

<下段>SD-01（北から）

図版12 出土遺物・その1

図版13 出土遺物・その2

図版14 出土遺物・その3

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

今回報告する柚木田遺跡は、平成12年度より開始された中山間地域総合整備事業福吉地区に伴い緊急発掘された遺跡である。平成12年度の試掘調査によってその存在が確認され、当初は土盛りによって遺構面の保全を図る予定で計画が進行していたものの、農政側の手違いにより最終的な設計においては削平を免れ得ない状況となってしまった。町教育委員会側がその事実を知ったのは平成13年度の末であり、平成14年度内の竣工が予定される状況の中で大幅な計画変更は困難であり、急速平成14年度事業として記録保存の為の発掘調査を行なうこととなった。

2. 調査期間

平成14年4月1日～平成14年10月31日（梅雨期～夏期を除く）

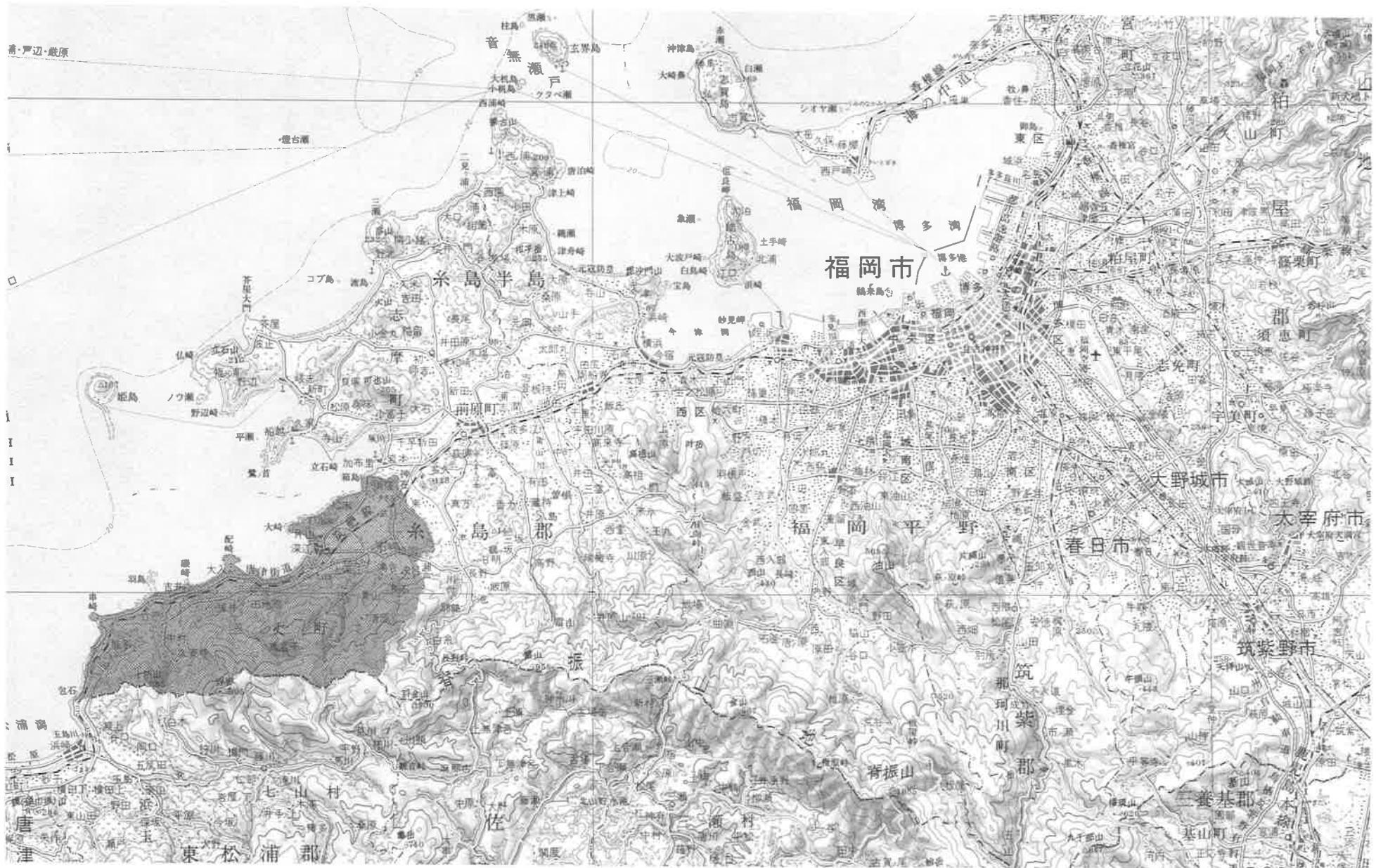
3. 調査体制

発掘調査

調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	藤田孝治
調査総括		教 育 課 長	青木楨夫
		教育課長補佐	大庭一成
		社会教育係長	清水絹枝
調査担当		主 任 主 事	村上 敦
調査作業		阿部恵美子、阿部庄吾、草場 伝、永田光恵、 宮崎千鶴、山崎末治、渡部拓馬	

報告書作成

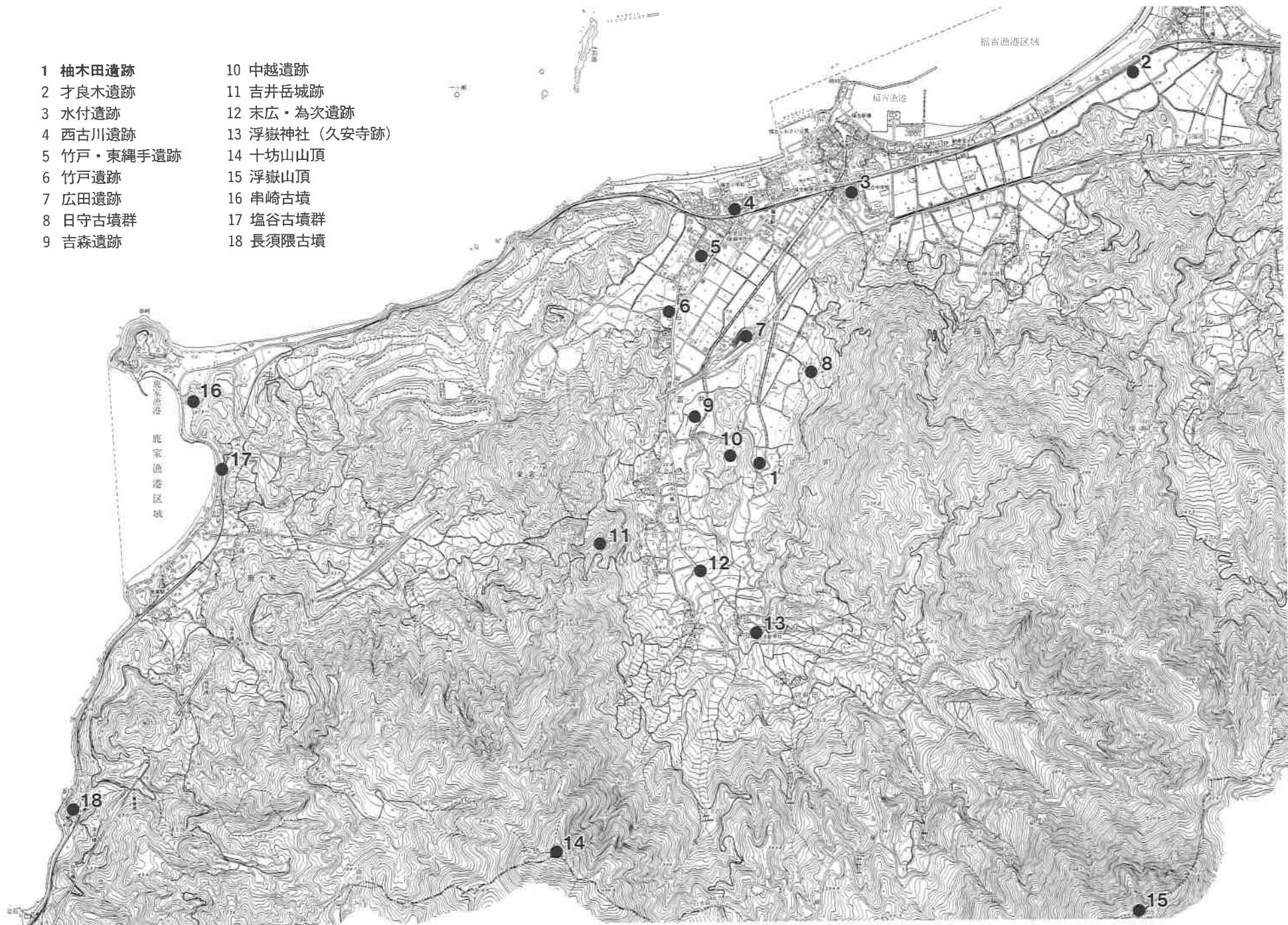
調査主体	二丈町教育委員会	教 育 長	藤田孝治
調査総括		教 育 課 長	青木楨夫
		教育課長補佐	大庭一成
		教育課長補佐	川島節夫
		社会教育係長	清水絹枝
調査担当		主 任 調 査	村上 敦
整理作業		木下文子、高木美枝	



第1図 二丈町位置図（縮尺1/200,000）

- 1 柚木田遺跡
- 2 才良木遺跡
- 3 水付遺跡
- 4 西古川遺跡
- 5 竹戸・東繩手遺跡
- 6 竹戸遺跡
- 7 広田遺跡
- 8 日守古墳群
- 9 吉森遺跡

- 10 中越遺跡
- 11 吉井岳城跡
- 12 末広・為次遺跡
- 13 浮嶽神社（久安寺跡）
- 14 十坊山山頂
- 15 浮嶽山山頂
- 16 串崎古墳
- 17 塩谷古墳群
- 18 長須隈古墳



第2図 町内主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）

4. 遺跡周辺の歴史的環境

柚木田遺跡は、二丈町大字吉井字柚木田に所在する。

吉井地区は、山間部を中心とした吉井上地区、沖積地と海浜地からなる吉井下地区に分けられ、概ね二丈・浜玉有料道路付近が両者の境界線となり、以北が吉井下地区、以南が吉井上地区となる。

この二丈・浜玉有料道路の建設に関連して、縄文時代晚期前半を中心とする広田遺跡の発掘調査が昭和53（1978）年、福岡県教育委員会によって行なわれており、大溝等から出土した土器の型式学的編年によって「広田式」が設定されている。また、その北東200mに位置する地点（広田遺跡IV区）は平成15年度に二丈町教育委員会によって発掘調査され、弥生時代前期末の甕棺墓17基等が検出されており、5号甕棺墓の棺内からはアマゾナイト製丸玉2点、碧玉製管玉12点が出土している。墓域の大半は現在も有料道路の地下に調査されないまま残されている模様であるため、全体像を捉えることはできないものの、弥生時代前期の甕棺墓群の発見は、二丈町内においてはこの地点の他には石崎地区遺跡群で調査例があるのみであり貴重な発見となった。また広田遺跡の北北西400mでは、同じく弥生時代前期のV字溝を伴う集落遺跡（竹戸・東縄手遺跡）が平成3（1991）年、町教育委員会によって発掘調査されている。また、詳細な位置は未確定ながら、JR福吉駅周辺の字「西古川」からは細形銅劍、異形鉄槍が発見されており、これらの遺物は東京国立博物館において保管されている。

古墳時代については、幾つかの小規模な群集墳が散見されるものの、調査例が少なくその実態は不明瞭な点が多い。広田遺跡の南東約300m地点においては日守古墳群が確認されているが、南北に細長い谷間の開口部付近の東側斜面に十数基が散在しており、横穴式石室の開口方向が狭小な谷奥に向かっているものが多い。今回報告する柚木田遺跡は、概ねこの方向、谷間の沖積地が山裾の洪積地へと移行する標高20～30m地点に位置する。

歴史時代においては、佐尉駅家の比定地のひとつである竹戸遺跡が昭和53（1978）年、県教育委員会によって発掘調査されている。道路状遺構は確認されていないものの、コの字型に配列される掘立柱建物跡群は充分にその蓋然性を伴うものであろう。また、吉井地区を見下ろす十坊山は、飛烽山の転化したものであるとの説もある。その山頂付近からは肥前風土記に記される松浦郡内の8ヶ所の烽のひとつ、褶振烽（鏡山）、並びに糸島郡志摩町の火山を望むことができ、烽の所在比定地の有力候補であり、古代交通史上重要な位置を占める。また、和名類從抄には怡土郡内の8つの郷名が記されるが、吉井地区はこのうちの良人郷に該当するものと思われる。

中世においては、元寇の節に関東より土着した吉井氏により吉井岳城が築かれたとされる。城下の中村集落には「御屋敷」「館」といった小字名が残されており、平時の居住地であったらしい。中世末期においては、原田氏の「幕下国士十二人衆」にも含まれる有力氏族であり、隣接する肥前松浦の草野氏、波多氏等との合戦が伝えられている。

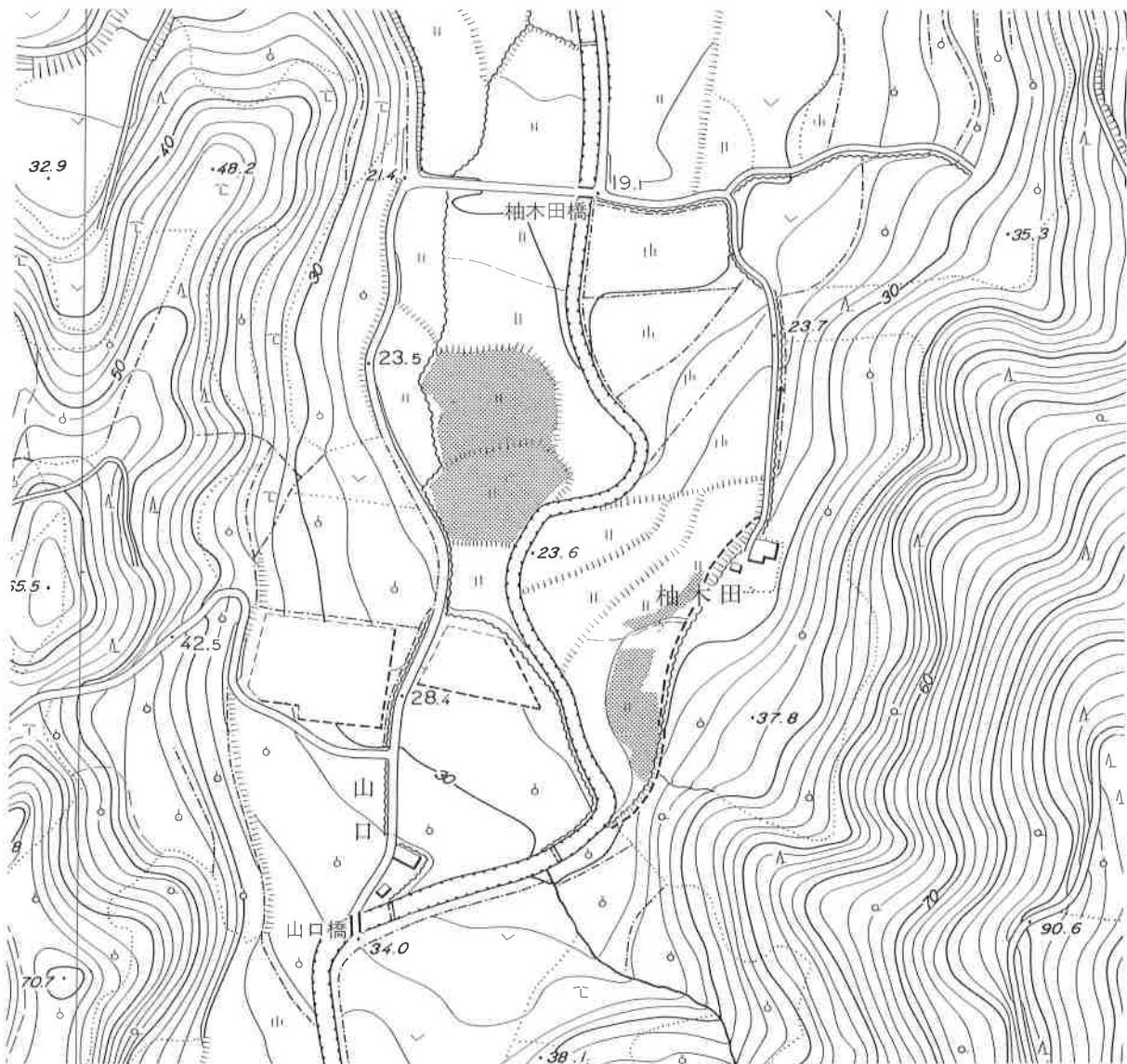
江戸時代においては、公領・唐津領を経て最終的には対馬藩の領域となり廃藩置県を迎える。

第2章 調査の概要

1. はじめに

遺跡の中央部付近を福吉川水系の東川が流れしており、この川の右岸（東側）を「右岸地区」、左岸を（西側）「左岸地区」として、削平を免れ得ない部分のみを調査対象とした。またその為に左岸地区においては調査区が2つに分断され、さらにN区とS区を設定した。この東川は、遺跡の上流で大きく蛇行しているために幾度か流れを変えたようであり、右岸地区の一部は流れによって遺構面が側面から削り取られ、また左岸地区においても蛇行した川が直行して流れた痕跡が残されている。川の氾濫は地形的に見れば事前に容易に推測できるものであり、何故にこの地が選地されたのかについては疑問が残るところである。

調査は左岸地区から開始し、作付作物の収穫をまって右岸地区へと移行した。調査面積は左岸地区が2,900m²、右岸地区が700m²となった。

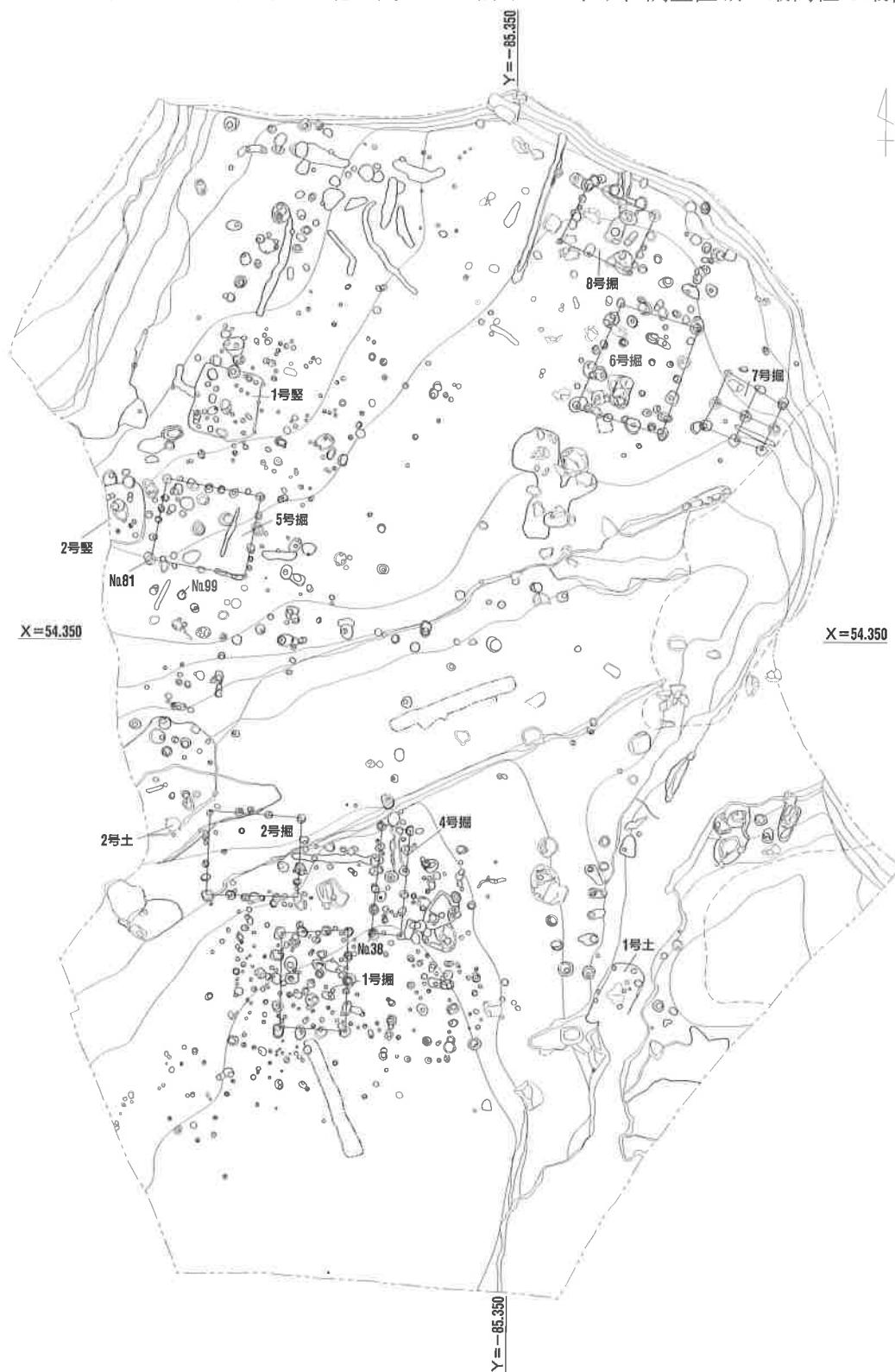


第3図 柚木田遺跡周辺地形図（縮尺1/2,500）

2. 左岸地区の調査

平成14年度の開始後間もなく重機を投入し、耕作土の除去作業を開始した。耕作土の直下には締まった赤土で形成された基盤層があり、当初はこれを遺構面であると誤認して500m²程作業を進行させてしまった。結果的には、この10cm程の基盤層の直下に遺構面が検出された。

検出された遺構面は、地形的には北に向かって緩やかに下り、調査区域の最高位と最低位では

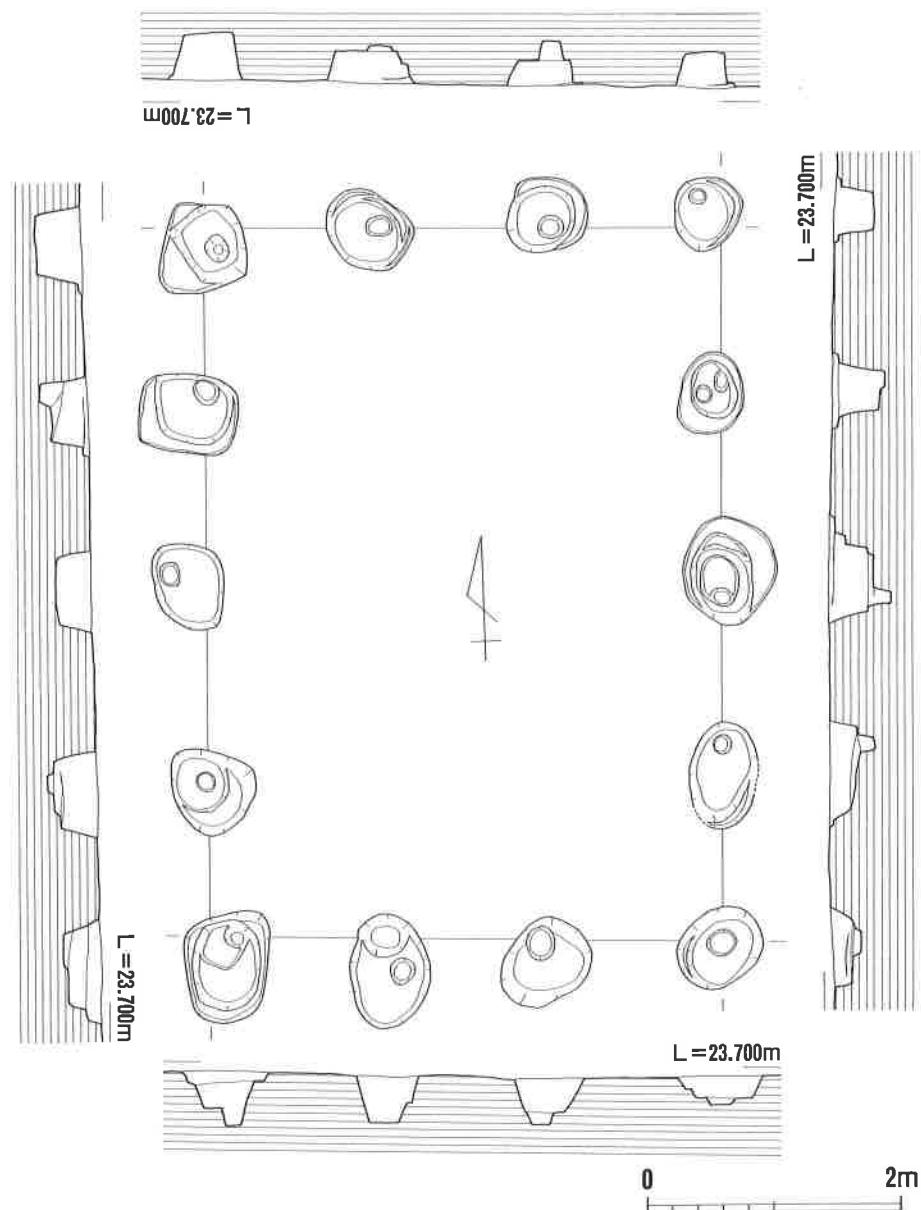


第4図 左岸地区遺構配置図（縮尺1/400）

1.5m程度の差があった。また、北部、北東部の調査区域外周部は過去の土地改良により、最大で1m程度削り取られていた。さらに中央部から北部にかけても全体的に削平を受けており、南部との間に30cm前後の落差があった。土質的には花崗岩風化土を多く含んだ粘質土で形成されているが、場所によって大きく変化し、特に北東部は砂地となる。また、調査区東部には河川が氾濫により直行して流れた痕跡が溝状を呈して残されており、遺構面の土質の変化もこの河川の氾濫の影響に依るものであろう。

a. 遺構

掘立柱建物跡8棟、竪穴住居跡2棟、土壙、土壙墓などが検出された。掘立柱建物跡は、調査区の北東部・中央部西寄り・南部の3ヶ所に位置し、北東部の3棟、南部の3棟

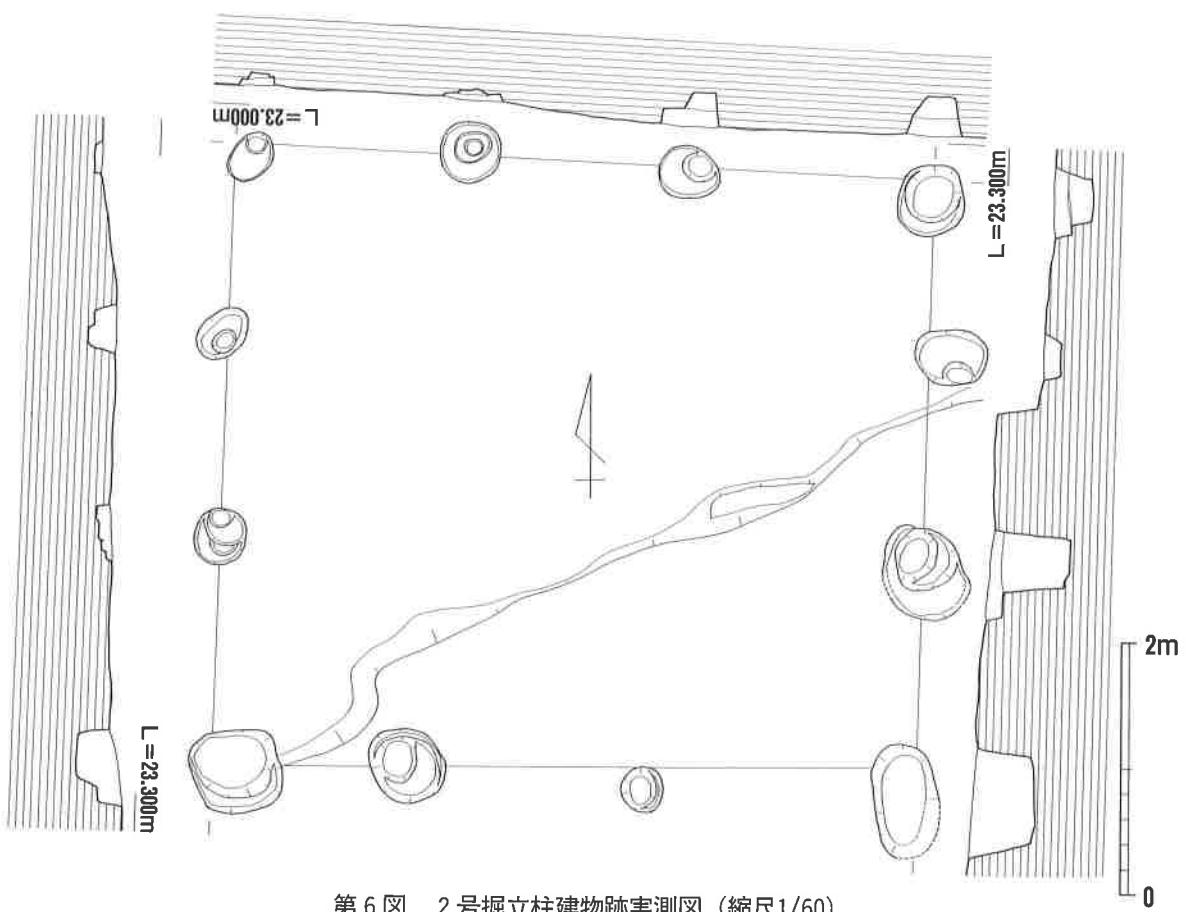


第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (縮尺1/60)

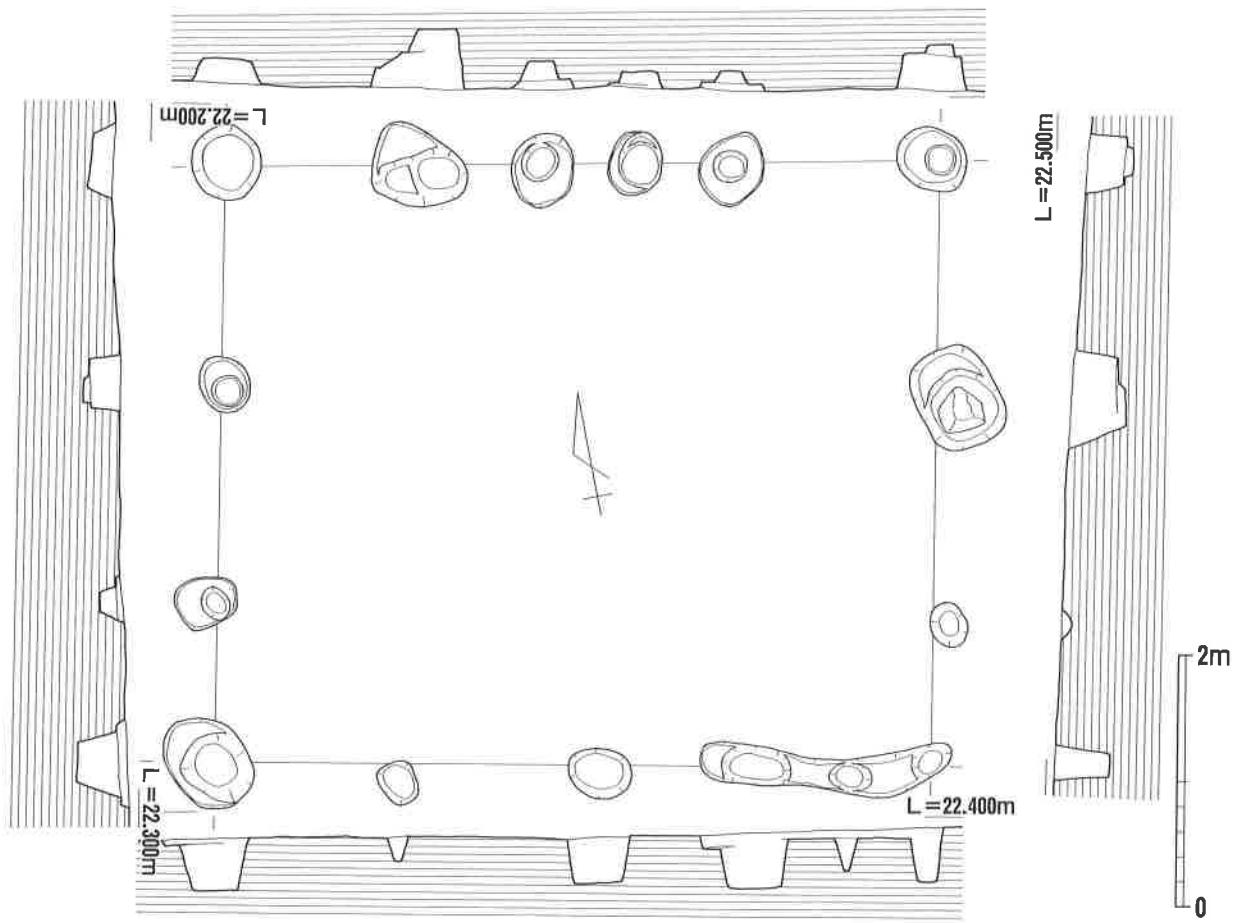
はそれぞれの群中においてほぼ同一の方向軸をもって建てられており、同時期に存在していたものであると思われる。

1号掘立柱建物跡 (第5図・図版4)

調査区の南部西寄りに位置する。桁行4間、梁行3間の柱穴配置をもつ。西側桁行間の柱穴の配置にはやや乱れがあるが、当遺跡の掘立柱建物跡群中では、最も整った掘立柱建物跡である。周辺には多数のピットが検出されており、建替えがあった可能性もあるが、明確なプランとして捉えることが出来なかった。また庇は無かったものと判断した。桁行方向の方位はN-3°-Wを示



第6図 2号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）



第7図 5号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）

し、隣接する2号掘立柱建物跡、4号掘立柱建物跡とは軸の方位が近似しており、同一時期に存在していたものであろう。

実測値は東側桁行5.66m、西側桁行5.60m、北側梁行4.12m、南側梁行4.06mを測り、身舎面積は23.03m²である。柱掘りかたの平面形は不整円形のものが多く、ほぼ半数が桁行方向に長軸をもつ。長軸0.5~0.9m、短軸0.5~0.7m、深さ0.2~0.5mを測り、柱穴は0.14~0.22mを測る。

2号掘立柱建物跡（第6図・図版5）

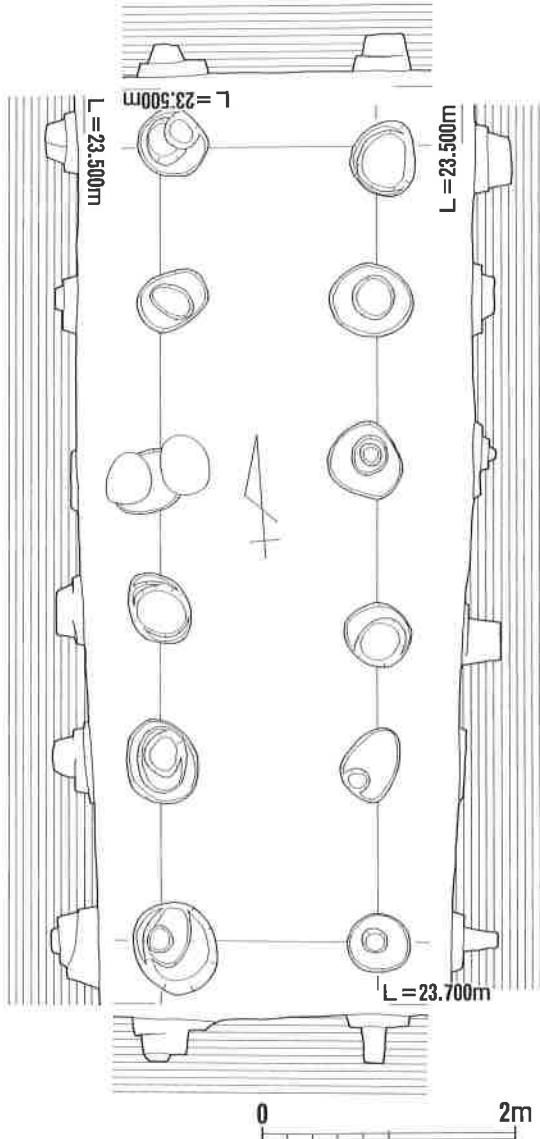
調査区南部西寄り、1号掘立柱建物跡の北西に位置する。遺構検出面の落差は後世の削平によるものであるが、柱穴底面のレベルからみて、北側に向かっての緩やかな傾斜があったものと見られる。桁行3間、梁行3間の柱穴配置をもち、東側梁行方向の方位はN-1°-Eであり、1号掘立柱建物跡と直交する値を示す。実測値は北側桁行5.56m、南側桁行5.58m、東側梁行4.66m、西側梁行4.98mを測り、身舎面積は26.74m²である。柱掘りかたの平面形は円形のものが多く、長軸0.3~0.9m、短軸0.3~0.6m、深さ0.06~0.6mを測り、全体的に小規模である。柱穴は0.14~0.3mを測り、柱穴の配置にはバラツキが大きい。

3号掘立柱建物跡

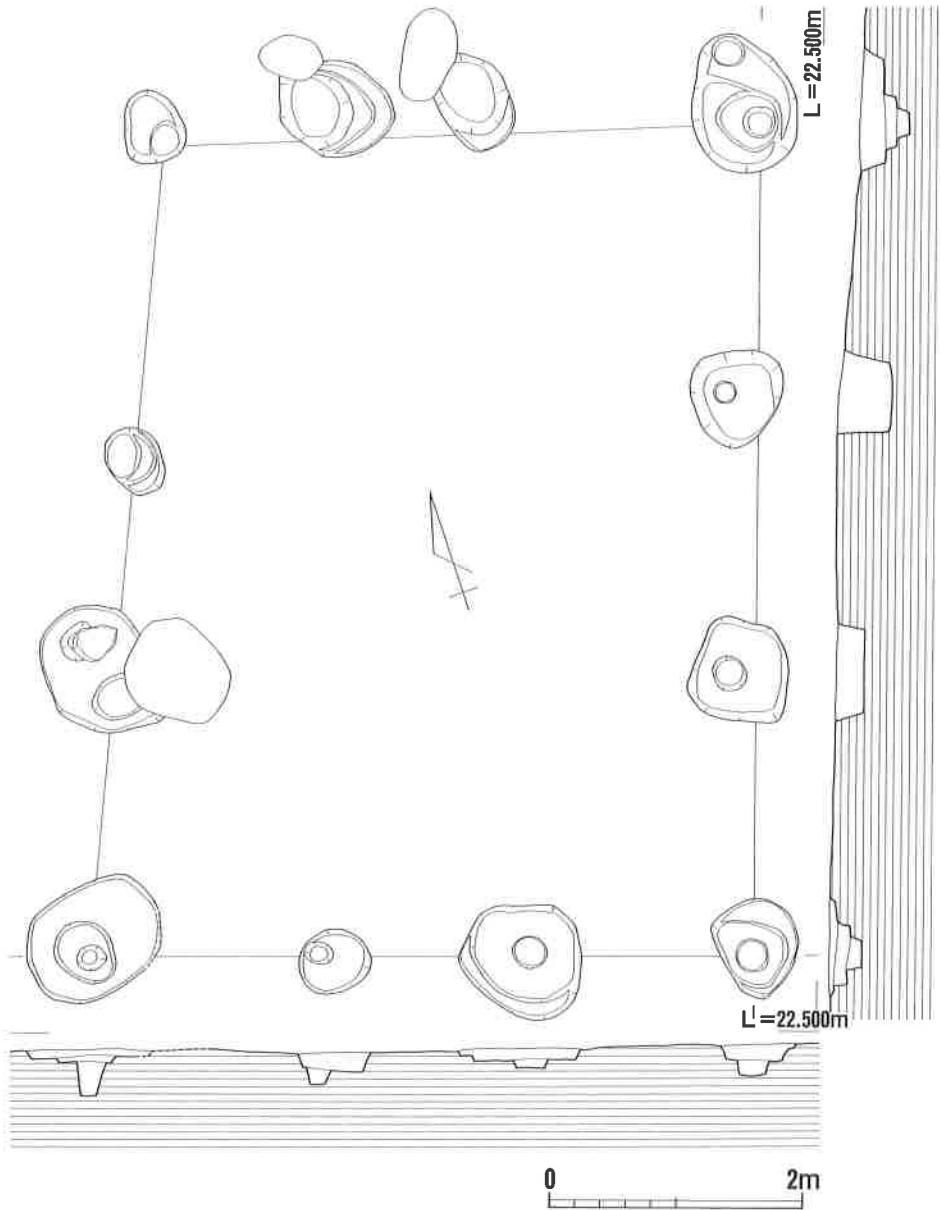
調査区南部の中央部付近、1号掘立柱建物跡の東側に位置する。調査段階においては掘立柱建物跡として認識していたものの、不規則な柱穴配置であり建物跡とするには躊躇する点が多く、本報告においては欠番とし図示もしていない。しかしながら、1号掘立柱建物跡と近似した方向軸をもつ何らかの建築物があった可能性は高い。

4号掘立柱建物跡（第8図）

調査区南部の西寄り、1号掘立柱建物跡の北東に位置する。桁行5間、梁行1間の柱穴配置をもつ南北に細長い建物跡である。桁行方向の方位はN-4°-Wを示し、1号掘立柱建物跡の桁行方向とほぼ平行関係にある。実測値は東側桁行6.30m、西側桁行6.28m、北側梁行1.72m、南側梁行1.73mを測り、身舎面積は10.85m²である。柱掘りかたの平面形は円形のものが多く、長軸



第8図 4号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）



第9図 6号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）

柱掘りかたの平面形は円形、不整円形のものが主であり、長軸0.3~0.8m、短軸0.3~0.6m、深さ0.2~0.4m、柱穴は径0.16~0.26mを測るが、南側桁間の東端部は布掘り柱掘りかた状を呈する。

6号掘立柱建物跡（第9図・図版6）

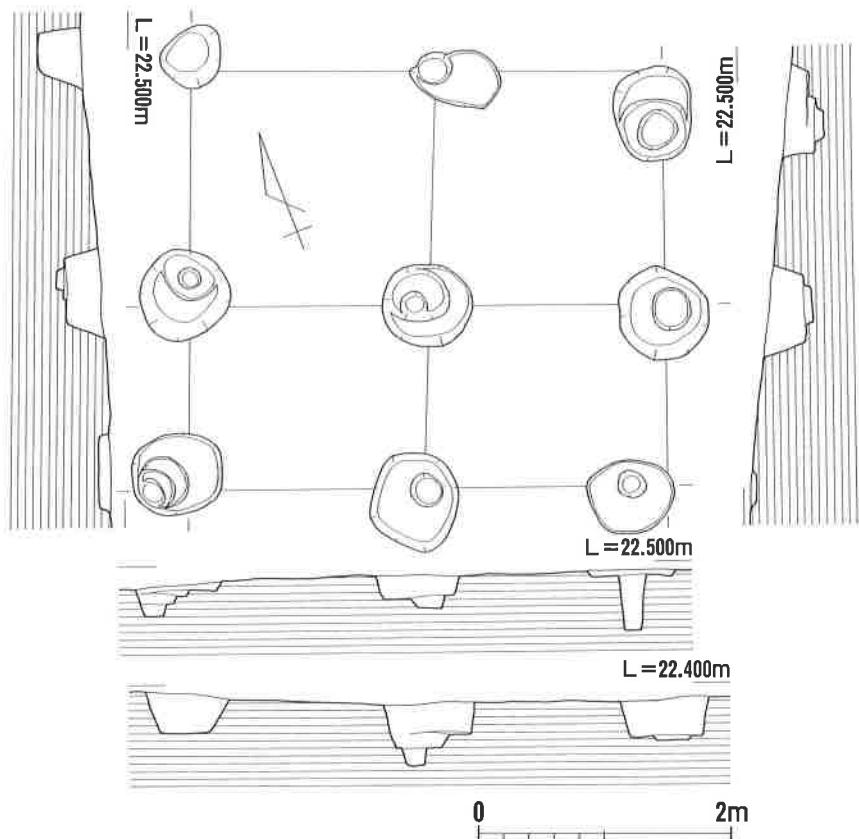
調査区の北東部に位置する。桁行3間、梁行3間の柱穴配置をもつ。東側桁行方向の方位はN-19°-Eを示し、調査区南部の掘立柱建物跡群とは約20°のずれがあるが、隣接する7号掘立柱建物跡、8号掘立柱建物跡とは近似した方位であり、同時期に存在したものであろう。

実測値は東側桁行6.58m、西側桁行6.44m、北側梁行4.76m、南側梁行5.28mを測り、身舎面積は32.68m²である。柱掘りかたの平面形は不整円形のものが主であるが、一部隅丸方形を呈す

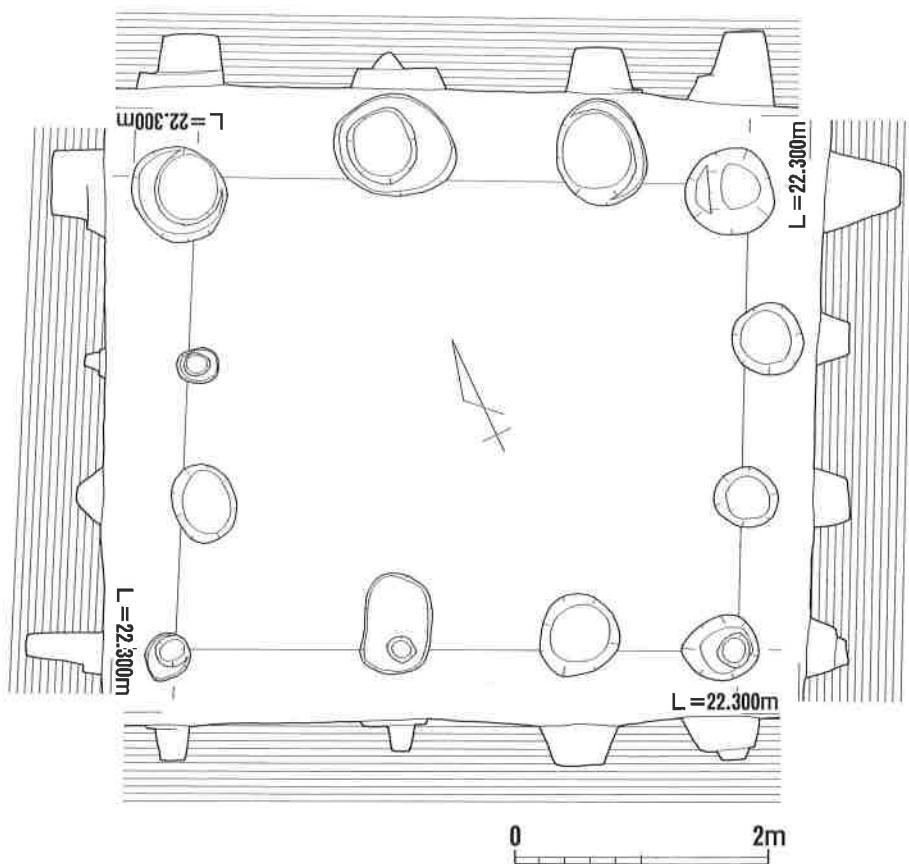
0.5~0.7m、短軸
0.4~0.6m、深さ
0.04~0.38mを測
り、柱柱は径
0.14~0.3mを測
る。

5号掘立柱建物跡（第7図・図版5）

調査区の中央部西寄りに位置する。変則的な配置であるが、桁行3~4間、梁行3間の柱穴配置をもつ。桁行方向の方位はN-80°-Wを示し、北に隣接する2号竪穴住居跡と直交関係にある。実測値は北側桁行5.66m、南側桁行5.66m、東側梁行4.80m、西側梁行4.70mを測り、身舎面積は26.89m²である。



第10図 7号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）



第11図 8号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）

るものもある。長軸0.5~1.1m、短軸0.4~0.8m、深さ0.1~0.4m、柱穴は径0.16~0.26mを測る。

7号掘立柱建物跡

(第10図・図版6)

調査区の北東部、6号掘立柱建物跡の東に位置する 2×2 間の総柱建物跡である。調査区北東部域は砂質土混じり赤土により遺構検出面が形成されているが、この掘立柱建物跡周辺は不純物の少ない完全な砂地であった。柱穴の配置は東西方

向にやや細長く、この方向が桁行であろう。南側桁行方向はN-69°-Wを示し、6号掘立柱建物跡の桁行方向とはほぼ直角的に交わる。実測値は北側桁行3.76m、南側桁行3.82m、東側梁行3.28m、西側梁行3.32mを測り、身舎面積は 12.51m^2 である。柱掘りかたの平面形は円形、或いは不整円形であり、長軸0.5~0.7m、短軸0.4~0.6m、深さ0.1~0.5m、柱穴は

径0.16~0.3mを測る。

8号掘立柱建物跡（第11図・図版7）

調査区の北東部隅、6号掘立柱建物跡の北に位置する。桁行3間、梁行3間の柱穴配置をもつが、その配置には乱れがある。

南側桁行方向の方位はN-65°-Wであり、6号掘立柱建物跡のものと直交に近い角度をもつ。実測値は北側桁行4.38m、南側桁行4.45m、東側梁行3.69m、西側梁行3.74mを測り、身舎面積は16.40m²である。柱掘りかたの平面形は円形、橢円形のものが多く、長軸0.3~1.0m、短軸0.3~0.8m、深さ0.2~0.6mを測り、柱穴は径0.18~0.26mを測る。

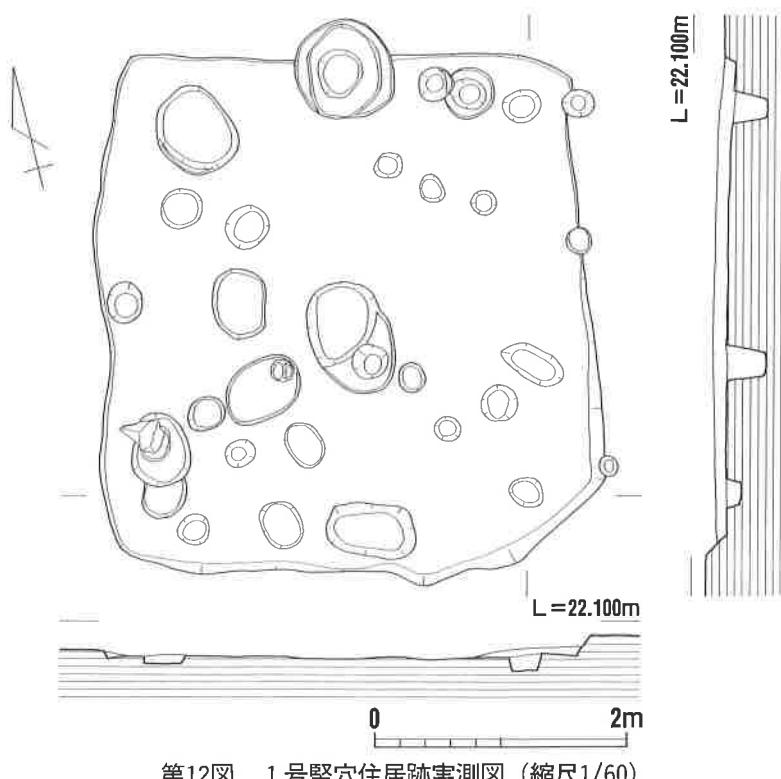
1号竪穴住居跡（第12図・図版8）

調査区の中央部西寄り、5号掘立柱建物跡の北側3mに位置する。南北にやや細長い方形を呈し、南北方向4.0~4.2m、東西方向3.8~4.1m、遺構検出面から床面までの深さは0.2mを測る。床面には多くの柱穴状遺構が検出されているものの、主柱穴を確定することができない。また、各辺の方向は5号掘立柱建物跡の方向とほぼ等しく、同時期に存在した可能性もある。

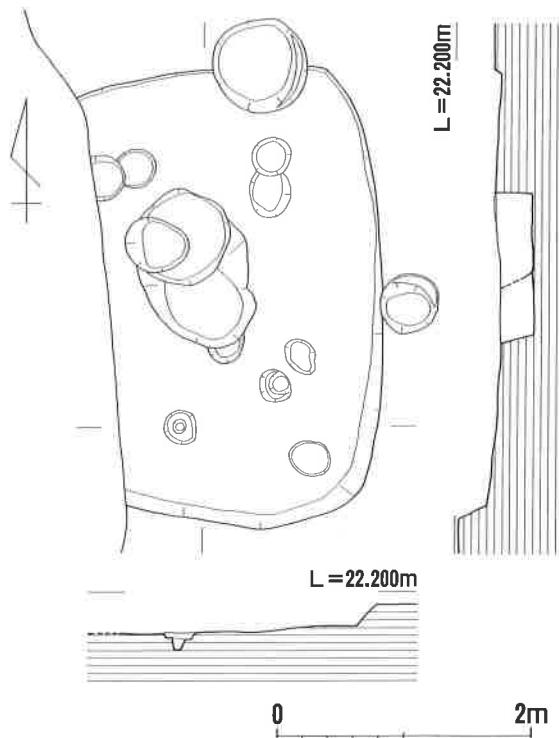
2号竪穴住居跡（第13図・図版9）

調査区の中央部西隅、5号掘立柱建物跡の西側に位置する。西半分が調査区外に延長しており全容は明らかにできなかった。平面形は隅丸の方形を呈し、南北方向は3.4~3.6m、床面までの深さは0.1~0.3mを測る。

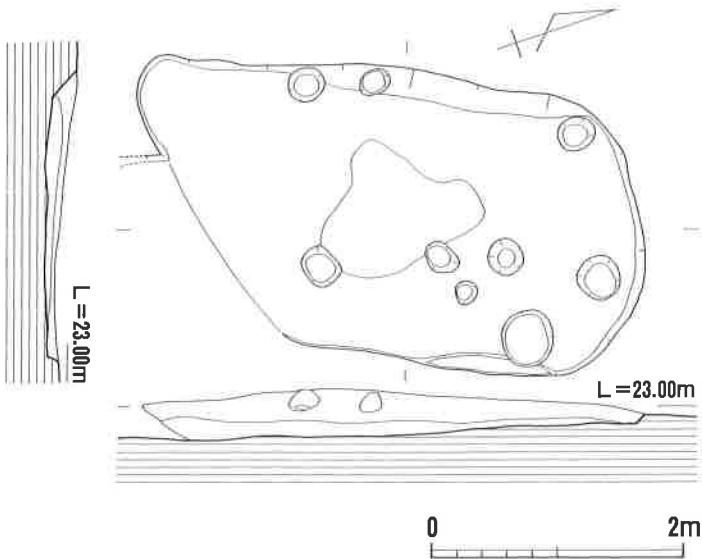
1号土壤・SX-54（第14図・図版9）



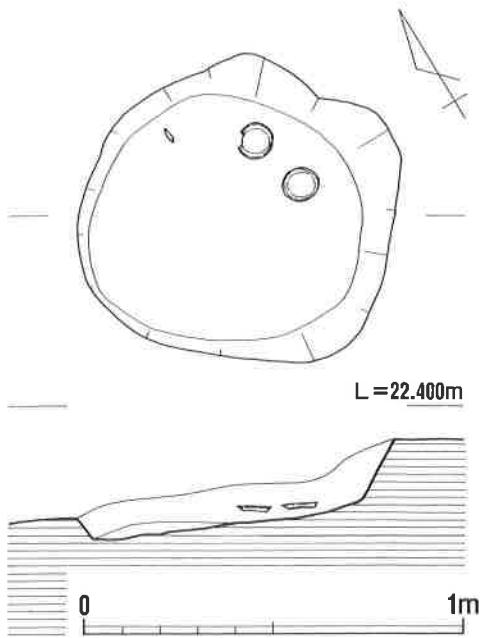
第12図 1号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）



第13図 2号竪穴住居跡実測図（縮尺1/60）



第14図 1号土壤実測図（縮尺1/60）



第15図 2号土壤実測図（縮尺1/20）

調査区南東部の河川氾濫痕跡の埋土上に形成された遺構であるが、検出が遅れてしまったために正確な平面プランを確認することが出来なかった。床面の中央部付近には炭化物の堆積が見られ、その周辺からは、黒色土器、土師器等の出土があった。

2号土壤（第15図・図版10）

調査区南部、2号掘立柱建物跡の西約1.5mに位置する。直径0.8~0.85mのやや不整形な円形を呈し、床面から約0.02m浮いた状態でほぼ完形の土師器の小皿が2枚出土した。膝を屈した状態で埋葬された墓であろう。

b. 遺物（第16図）

1は5号掘立柱建物跡柱穴（No.81遺構）から出土した須恵器・蓋杯の身である。口径10.9cmに復元される。色調は灰色を呈し、焼成は硬質。胎土は精錬される。

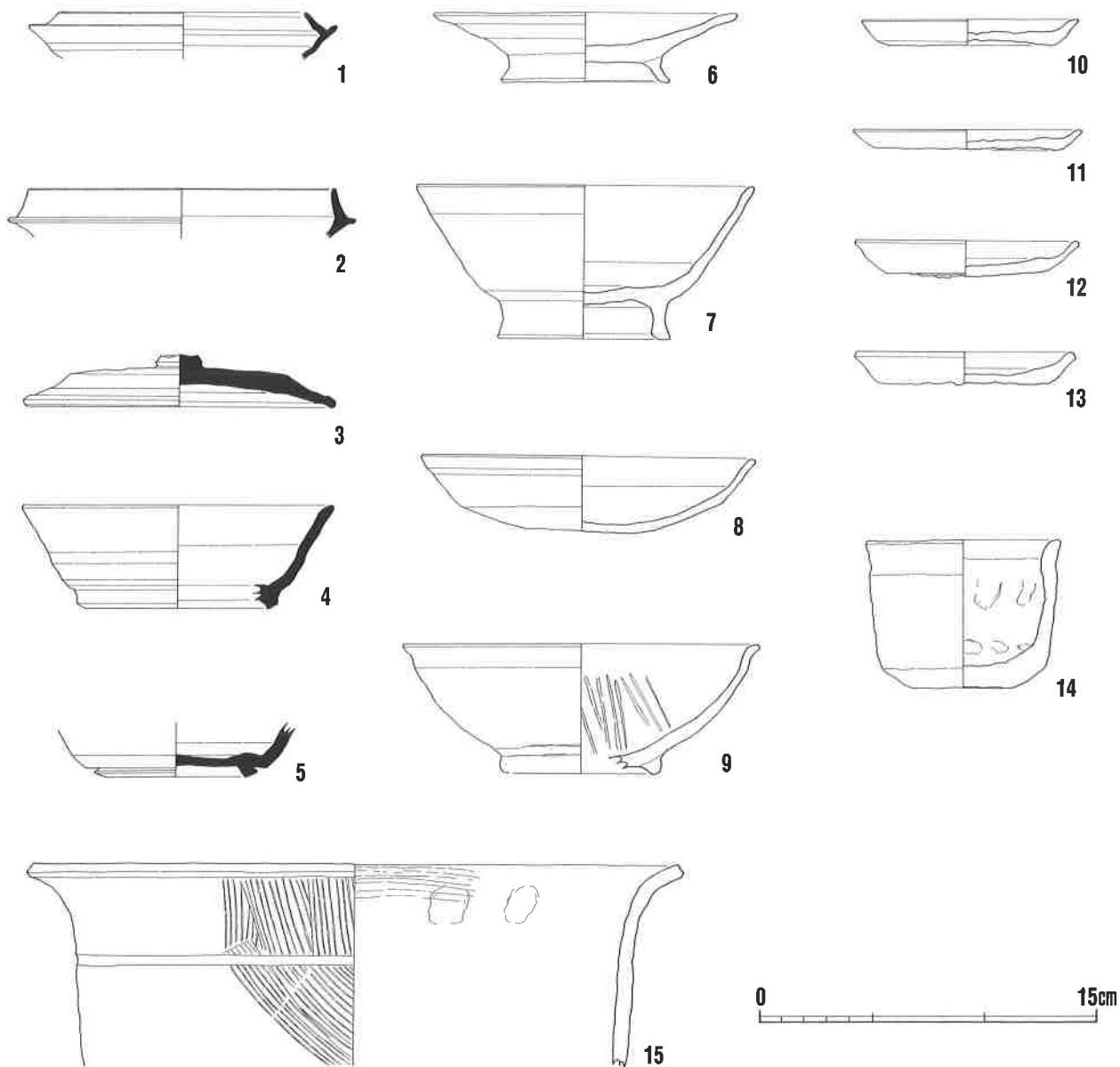
2は4号掘立柱建物跡柱穴（No.38遺構）から出土した須恵器・蓋杯の身である。口径13.6cmに復元される。色調は内外面、断面ともに赤褐色を呈し、焼成は硬質である。色調は暗赤褐色を呈し、焼成はやや不良、胎土は精錬される。

3～6は調査区北西隅部包含層からの出土である。3は須恵器の蓋であり、口径は14.0cmに復元される。内部のかえりは消失し、つまみの形態にも退化傾向が見受けられる。色調は青灰色を呈し、焼成はやや不良で若干軟質気味、胎土は精錬される。内面には薄く黒色を呈する部分があり、研磨されたような滑らかさがある。硯として利用された可能性もある。4は須恵器の杯である。口径14.0cm、器高4.6cm、高台径9.1cmに復元される。色調は青灰色、胎土は精錬され、焼成はやや軟質である。5は須恵器の杯である。高台径7.3cmに復元される。色調は青灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は精錬される。6は土師器の高台付皿である。口径13.6cm、高台径7.6cmに復

元され、器高は3.1cmを測る。色調は淡燈色を呈し、焼成は良好、胎土は須恵器なみに精錬される。

7は5号掘立柱建物跡周辺から出土した土師器の椀である。口径は15.0cmに復元され、器高6.9cm、高台径7.7cmを測る。外面の色調は淡灰燈色、内面には炭素が吸着し黒色を呈する部分がある。

8～11は1号土壙（SX-54）からの出土である。8は土師器の杯である。口径14.9cm、器高3.4cmを測り、底部はヘラ状工具により切り離された後、丸底状に押し出され、ナデ仕上げされる。色調は淡燈灰色を呈し、焼成は不良で脆い。胎土は精錬されるが、1～2mm程度の砂粒を混入させる。9は瓦器の椀である。口径15.8cm、高台径7.2cmに復元され、器高5.8cmを測る。内面にのみ炭素が吸着し、粗い磨きが施される。色調は外面暗灰色、内面は黒色を呈する。10、11は



第16図 左岸地区出土遺物実測図（縮尺1/3）

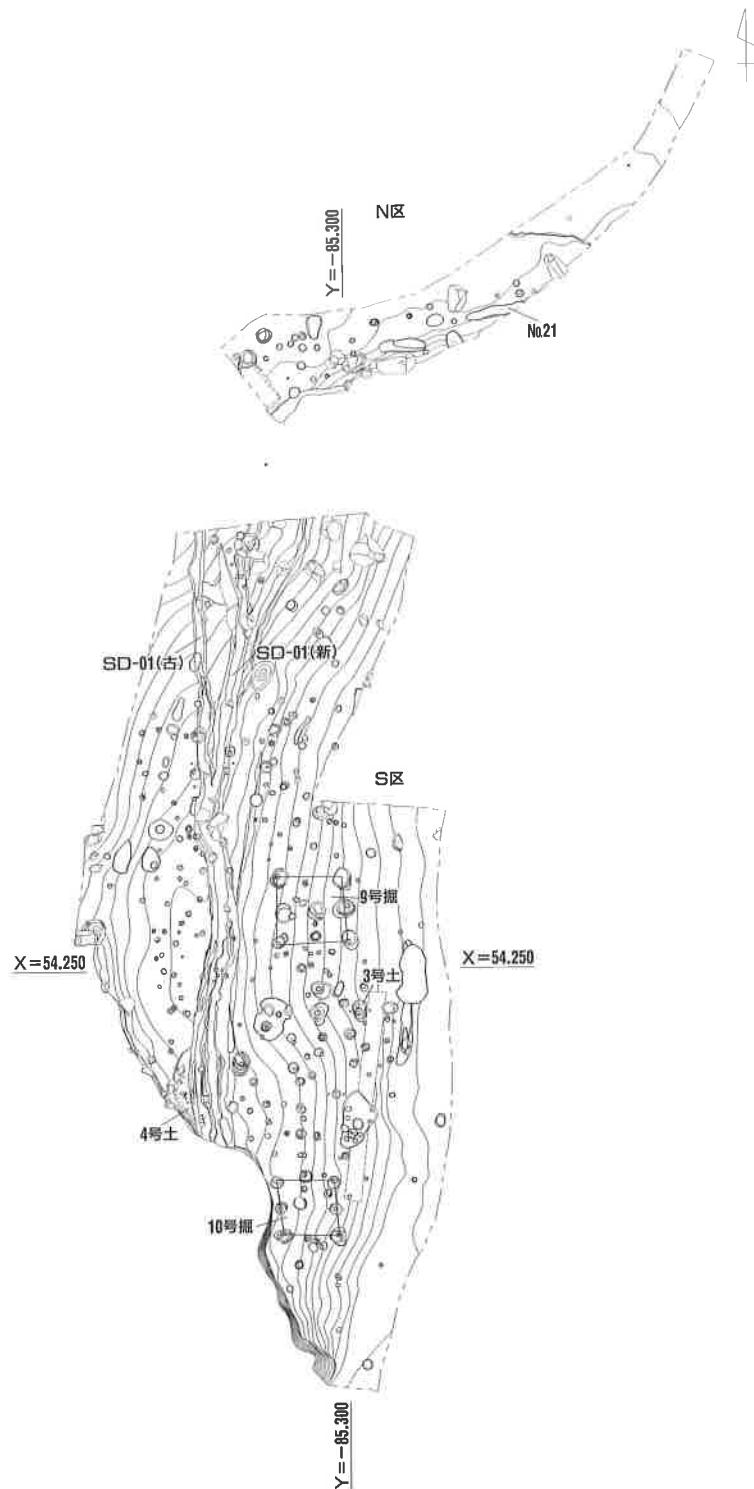
土師器の小皿である。10は口径9.7cm、器高1.1cm、底径7.3cm、11は口径10.2cm、器高0.9cm、底径8.1cmを測る。併に底部の切り離し方法はヘラ切りによるものであり、板目状の圧痕が残される。12、13は2号土壙から出土した土師器の小皿である。第15図のうち、北側が12、南側が13である。12は口径10.05cm、器高1.6cm、底径7.2cm、13は口径9.9cm、器高1.4cm、底径7.6cmを測る。併に底部の切り離し方はヘラ切りによるものである。14は5号掘立柱建物跡南1.5mのNo.99遺構(pit)から出土した

土師器の埴である。口径8.8cm、底径4.4cmに復元され、器高は6.6cmを測る。

15は包含層出土の甕形土器である。口径は29.2cmに復元される。器表外面には縦、または縦斜め方向のハケ目調整痕が残され、口縁部直下には幅5cmの沈線が巡る。内面の口縁部付近には横方向の粗いハケ目痕、指頭圧痕が残る。

3. 右岸地区の調査

浮嶺より北に派生する山塊の西側裾部、左岸地区の南東約600mに位置する。削平される部分のみを調査対象としたため、調査区は北側のN区と南側S区に分断される。N区は調査面積約100m²と狭く、明確な遺構は確認できなかった。遺構面はほぼ平坦であるが、北東に向かって僅に傾斜する。S区の遺構面は東から西に向かって大きく傾斜し、最高位と最低位では約4.5mの比高差がある。土質的には全体的に花崗岩風化土混じりの赤土である。



第17図 右岸地区遺構配置図（縮尺1/400）

遺構の分布はS区に集中して見られ、溝状遺構、掘立柱建物跡などが検出された。また、S区の南西部は東川の氾濫によって削り取られ、溝状遺構などが側面から削平されていた。

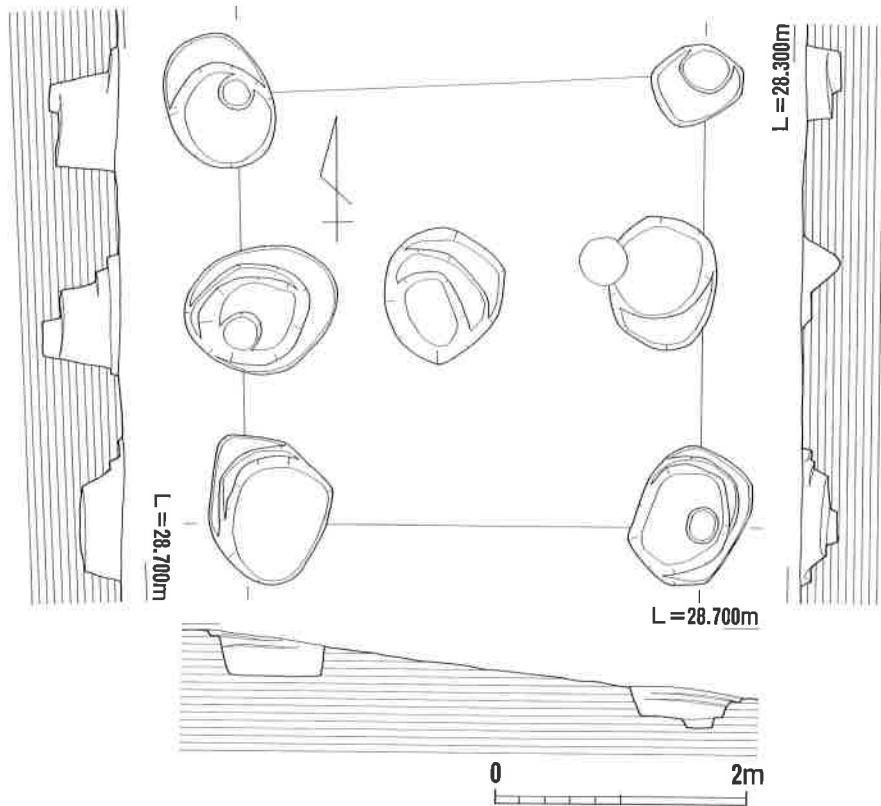
a. 遺構

9号掘立柱建物跡（第18図・図版7）

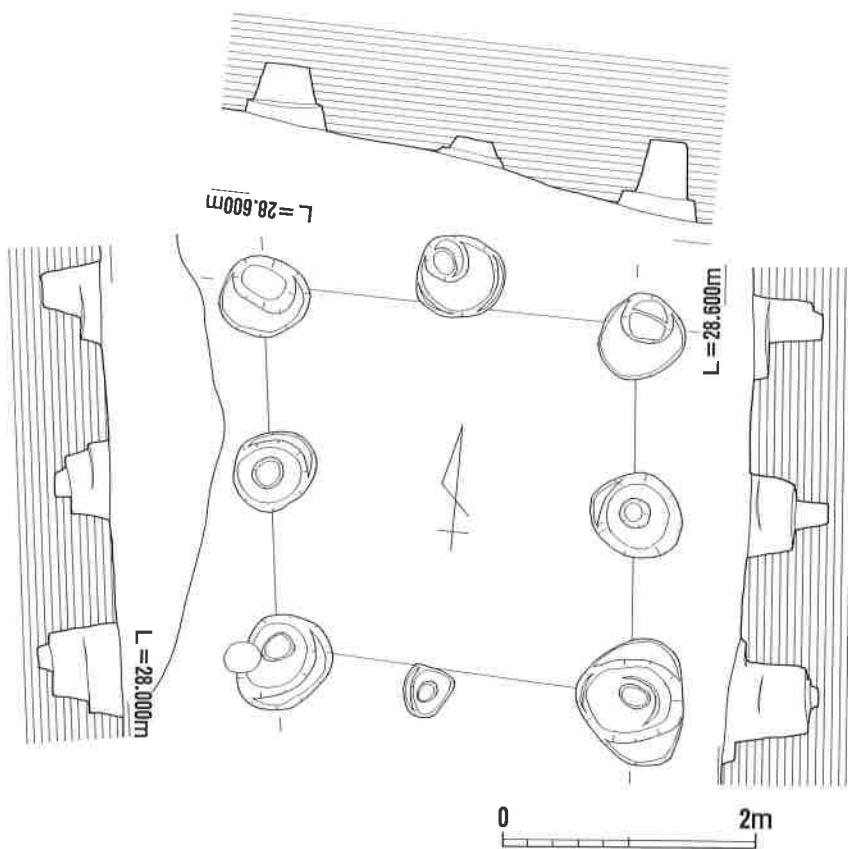
右岸地区S区中央部やや東寄りに位置する。桁行1間、梁行2間の柱穴配置であるが、桁行と梁行の長さがほぼ等しく、中央部に束柱用の柱穴がある。北側桁行の方位はN-92°-Wを示し、実測値は北側桁行3.73m、南側桁行3.60m、東側梁行3.60m、西側梁行3.40mを測り、身舎面積は12.83m²である。柱掘りかたの平面形は楕円形のものが多く、長軸0.7~1.2m、短軸0.16~1.0m、深さ0.3~0.6m、柱穴は径0.2~0.3mを測る。

10号掘立柱建物跡（第19図・図版8）

右岸地区S区南端部に位置する。2×2間



第18図 9号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）



第19図 10号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）

の柱穴配置であるが、西側が河川氾濫により削平された部分に接しているので、この部分に延長していた可能性もある。桁行（東西軸）の方位は北側でN-89°-Wを示し、実測値は北側桁行3.0m、南側桁行2.84m、東側梁行2.84m、西側梁行2.88mを測り、身舎面積は8.41m²である。柱掘りかたの平面形は円形のものが多く、長軸0.4~1.0m、短軸0.4~0.8m、深さ0.2~0.7m、柱穴は径0.14~0.24mを測る。

3号土壙（第20図・図版10）

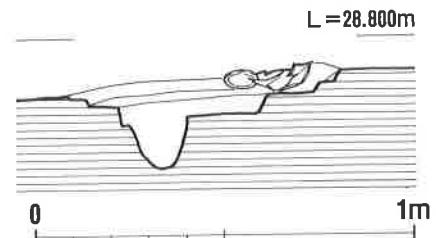
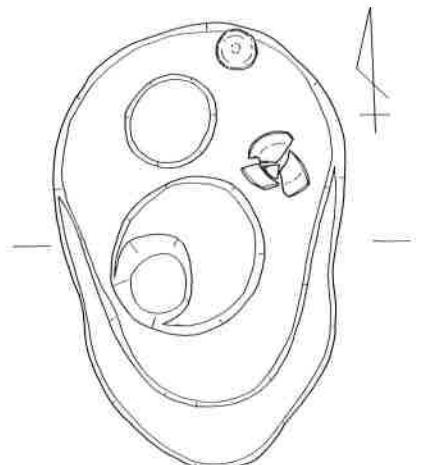
右岸地区S区の中央部南西寄りに位置する楕円形の土壙であり、2基のピットを切る。長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。黒色土器、土師器小皿が床面直上から出土した。

4号土壙（第21図）

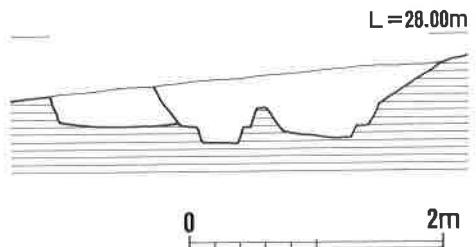
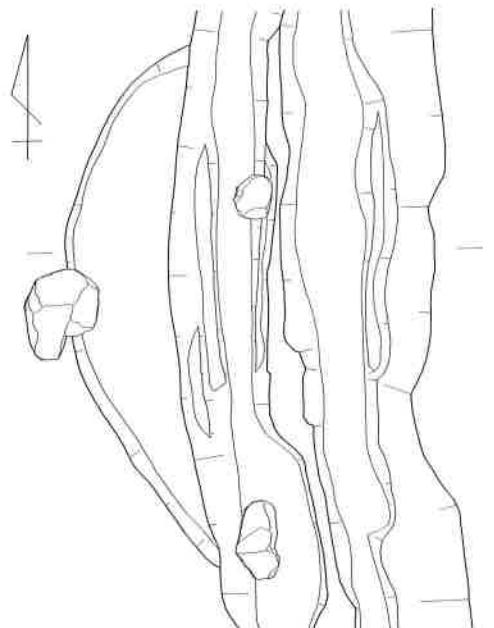
右岸地区S区の南部に位置する土壙である。SD-01の西壁に切られるため全容は不明であるが、SD-01の東壁には切られていないので、楕円形を呈していたものと思われ、竪穴住居ではないようである。弥生時代前期の甕形土器、石庖丁などが出土した。

溝状遺構・SD-01（第22図・図版11）

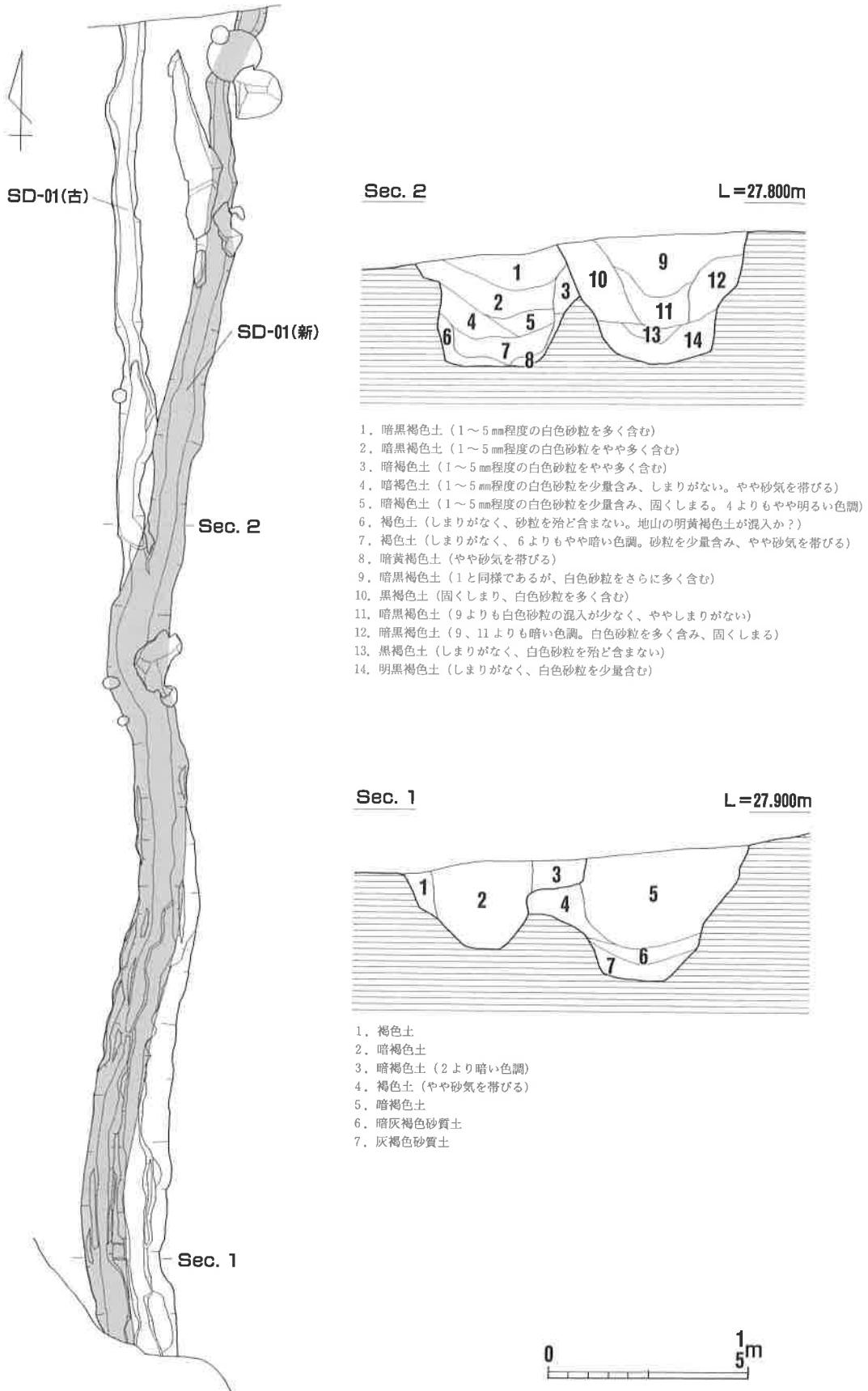
右岸地区S区を南北に縦貫する溝状遺構である。北端部は調査区域外に延長するが、N区においては検出されていない。南端部は河川の氾濫により抉り取られるが、長さ約33mが遺存する。南半部においては平面的な切りあい関係を断定することが出来ないままY字状に掘り下げてしまったが、本来は時期差のある2本の溝状遺構がX字状に絡んだものであることがその後の断面観察等により確認された。つまり北端部での東側の溝状遺構と南端部での西側の溝状遺構は同一の遺構（SD-01新）であり、北端部での西側の溝状遺構と南端部での東側の溝状遺構も同一の遺構（SD-01古）であった。結果的にはSD-01新の南半部の西側壁の上半部を飛ばしてしまっている。主軸方位は、SD-01古はN-1.5°-W、SD-01新はN-5°-Eを測り、基本的に直線的ではあるが、地山内に埋もれる巨石を



第20図 3号土壙実測図（縮尺1/20）



第21図 4号土壙実測図（縮尺1/60）



第22図 溝状遺構実測図（縮尺1/150・1/30）

迂回するなどしてやや乱れる部分もある。両溝ともにほぼ同じ規模を呈しており、幅は0.9m前後、深さは0.4~0.6mである。河川に接した山裾という立地からは、防御を目的としたとは考え難い。

b. 遺物（第23図）

16はSD-01（新）北部から出土した須恵器の蓋である。口径10.5cmに復元される。色調は暗青灰色を呈し、焼成はやや軟質、胎土は精錬されるが白色の微細な粒を混入する。

17はSD-01（古）南部から出土した須恵器の蓋である。口径12.3cmに復元される。色調は青灰色を呈し、焼成はやや不良で焼成前の乾燥が不十分であったものであろう。胎土は精錬される。

18はSD-01（新）北部から出土した須恵器の蓋である。口径は10.5cmに復元される。色調は暗青灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は精錬される。

19はSD-01（新）中央部から出土した須恵器の蓋である。口径は16.8cmに復元される。内部に返り、宝珠つまみを有する。色調は暗青灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は精錬される。

20はSD-01（新）中央部から出土した須恵器の蓋である。口径は18.9cmに復元される。内部に返りを有し、色調は赤褐色を呈するも焼成は硬質、胎土は精錬される。

21はSD-01（新）中央部から出土した須恵器である。口径は11.8cmに復元される。製作時にあたって、粘土で開口部を完全に塞いだ後、その横に新たに口縁部を設けてあるため、器種は平瓶の類であろう。色調は黒灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は精錬される。

22はSD-01（古）の南部から出土した須恵質の壺の口縁部である。口径は12.0cmに復元される。口縁の立ち上がり部外面に竹管文が施される。色調は青灰色を呈し、焼成は良好であるが、他の須恵器と比較して特に硬質といったものではない。胎土は精錬され、内面には自然釉が掛かる。

23はSD-01（新）のSec. 2部分、13層から出土した須恵器の杯である。口径10.6cm、器高3.7cm、底径6.8cmを測る。色調は暗灰燈色を呈し、焼成はやや不良。胎土は精錬されるものの、白色の微細粒を含む。外面底部にはアスタリスク状のヘラ書きが施される。

24はSD-01（新）から出土した盤である。口径18.0cmに復元される。底部の下半部にはカキ目が施される。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は硬質、胎土は精錬されるも白色微細粒を多く含む。

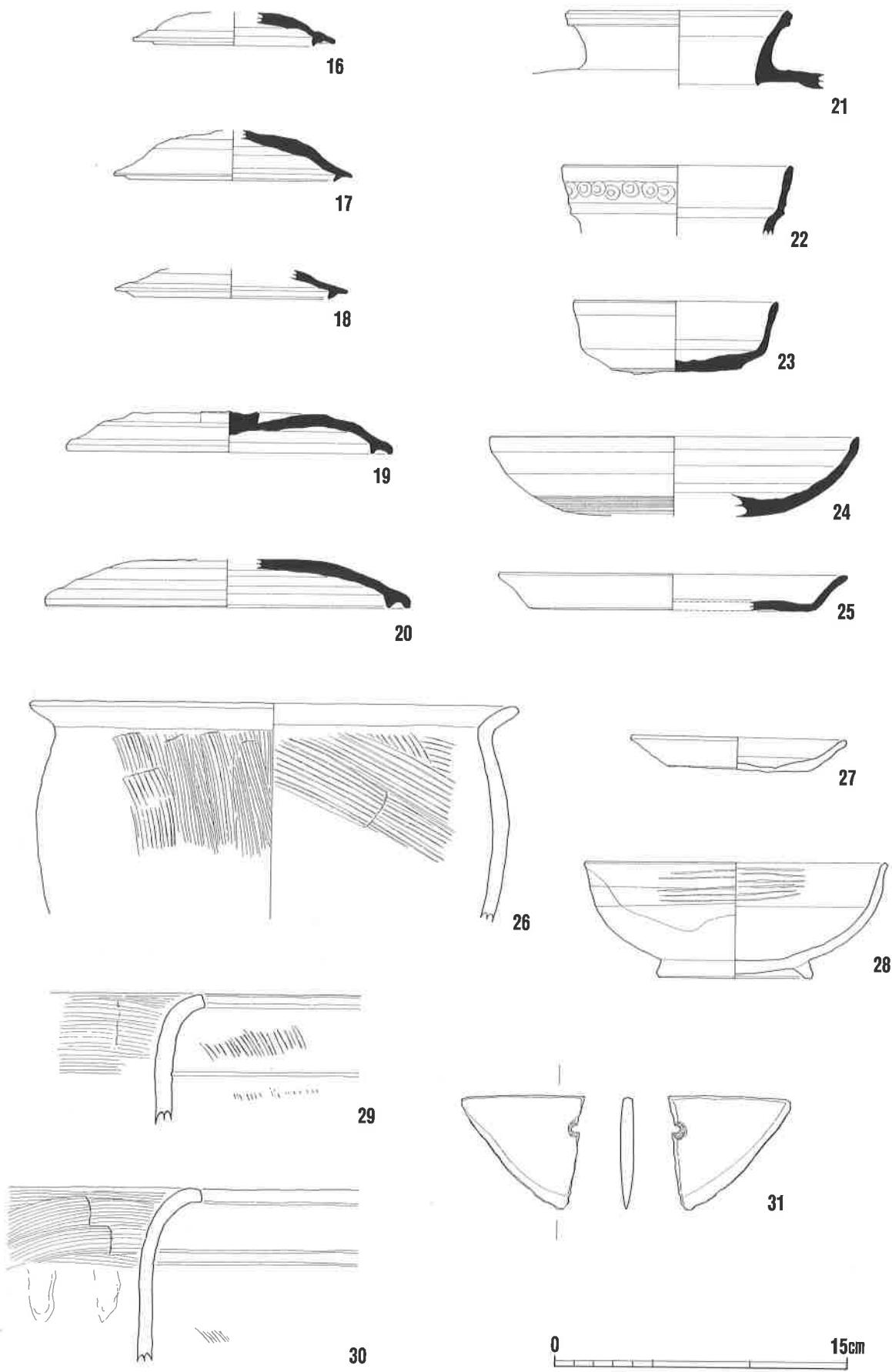
25は4号土壙から出土した須恵器の皿である。口径は18.0cm、底径は14.9cmに復元され、器高は1.9cmを測る。混入品であろう。

26はN区中央部の小規模な溝状遺構（No.21遺構）から出土した土師器の甕である。口径は25.2cmに復元される。外面には縦方向、内面には斜め方向のハケ目が残される。色調は淡燈色を呈し、焼成は良好、胎土は精錬されるが砂粒を少量混入する。

27, 28は3号土壙からの出土である。

27は土師器の小皿であり、口径11.1cm、器高1.7cm、底径7.5cmを測る。底部の切り離しはヘラによるものである。

28は黒色土器の椀である。口径15.6cm、器高6.0cm、高台径8.0cmを測る。内面の全面と、外面の口縁部周辺に炭素が吸着し深みのある黒色を呈する。黒色部分には磨かれた痕跡が確認される。炭素を吸着しない部分の色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は精錬され、非常にきめ細かい感触がある。



第23図 右岸地区出土遺物実測図 (縮尺1/3)

29, **30**, **31**は4号土壙からの出土である。**29**は弥生時代前期の甕である。口縁部周辺の小片であるため口径の復元には至らない。口縁部下に1条の沈線が巡る。色調は白褐色を呈し、焼成は良好、胎土には小砂粒を多く混入する。**30**は弥生時代前期の甕の口縁部周辺である。口径の復元には至らない。口縁部下には2条の沈線が巡る。色調は淡燈色を呈し、焼成は良好、胎土は精錬されるが小砂粒を多く混入する。**31**は石庖丁である。三分の二程度を欠損する。石材は粘板岩であろう。

第3章 おわりに

柚木田遺跡の特徴のひとつは、その立地環境にある。水田地帯を囲み込むような奥深い谷間の最深部に位置し、右岸地区の一部からは水田地帯の全域と玄海灘を望むこともでき、水田経営に携わるには適した場所と言えるであろう。しかしながら、東川の最も蛇行する部分に接し、その氾濫により遺構が削り取られている部分もあるなど安全な場所とは言い難く、この点からは建物を建設する場所としては適しているとは言えない。掘立柱建物跡、溝状遺構などの古墳時代の主だった遺構からは6世紀後半～7世紀中頃の遺物が出土している。掘立柱建物跡は少なくとも9棟が確認できるが、中軸方向は左岸地区の1, 3, 4号掘立柱建物跡、右岸地区の9, 10号掘立柱建物跡がほぼ真北方向を指向し、左岸地区の5, 6, 7, 8号掘立柱建物跡はその西約20°前後を指向する。前者と後者の違いは時期差に因るものであると考えられるが、数少ない柱穴出土遺物の対比からは前者が後者よりも古い様相を呈するものの、言うまでもなくこれらはその上限を示すだけであり前後関係を明らかにすることはできない。右岸地区S区の溝状遺構の出土遺物の年代、7世紀前半～7世紀中頃にまで下る可能性もある。検出された全ての掘立柱建物跡の中軸線には指向性があり、平面形には大きな歪みが認められるものがあるが計画的に建築されたものであることは確実であり、少なくとも庶民的な階層の建物群ではない。現時点では公的・官衙的とも言い難く、遺跡の北北東約300～800mの範囲に散在する後期の群集墳・日守古墳群との関連を考えるならば、地方豪族クラスの居住地と考えることが適當であろう。左岸地区の4号掘立柱建物跡(5間×1間)、7号掘立柱建物跡(2間×2間)は総柱の構造をもつて高床式の倉庫であったものと考えられるが、4号掘立柱建物跡のような1間幅の細長い建物は稻作開始期には見られるものの古墳時代以降においては珍しく、地域色の強い建物跡である。10号掘立柱建物跡は、右岸地区S区の遺跡の中でも最も高い場所に位置し、柱穴掘りかたの規模も大きく深い。構造的にも束柱を伴わない2間×2間の規模であり、物見やぐら的な建物を想定することが可能であろう。同じく右岸地区S区の溝状遺構は下方約十数mに河川が流れており、少なくとも下方からの侵入者への防御的な機能を有していたとは考え難い。両端が削平されているため全容は不明であるが、地形的にみても環状を呈していたとも考え難く、9, 10号掘立柱建物跡の位置する溝状遺構の上方、東側のエリアを何処と分離しようとするものなのかは不明である。上方からの流水を食い止めるものと考えるならば、この溝状遺構と河川との間に主要な建物跡などが存在しているのかも知れない。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	よしいちくいせきぐん3 一ゆのきだいせきのちょうさー
書名	吉井地区遺跡群III 一柚木田遺跡の調査—
副書名	二丈町文化財調査報告書
卷次	第32集
シリーズ名	中山間地域総合整備事業福吉地区関係埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	III
編著者名	村上 敦
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1360
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
柚木田遺跡	福岡県糸島郡二丈町大字吉井字柚木田	40462	—	33°	130°	20020401	3,600 m ²	ほ場整備事業	
	種別	主な時代		29'	04'	20021031			
	建物跡群	古墳時代		12"	53"			特記事項	
				主な遺構		主な遺物			

図 版

図版 1



遺跡上空から唐津湾方面を望む（南から）

図版2



左岸地区全景（空中写真）

図版3



右岸地区全景（空中写真）

図版 4



遺跡遠景 十坊山・浮嶽山麓を望む（北から）



1号掘立柱建物跡（南から）

図版5

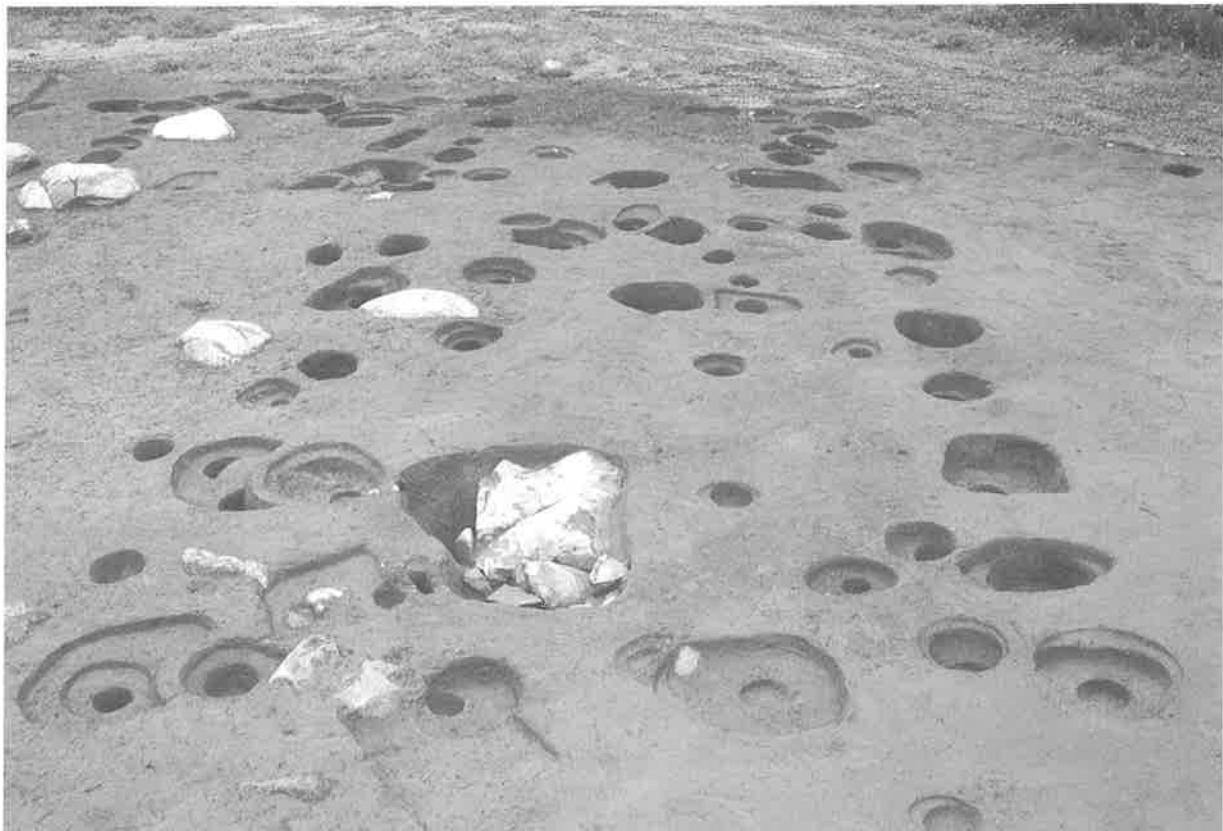


2号掘立柱建物跡（東から）



5号掘立柱建物跡（東から）

図版6



6号掘立柱建物跡（南から）



7号掘立柱建物跡（南から）

図版 7

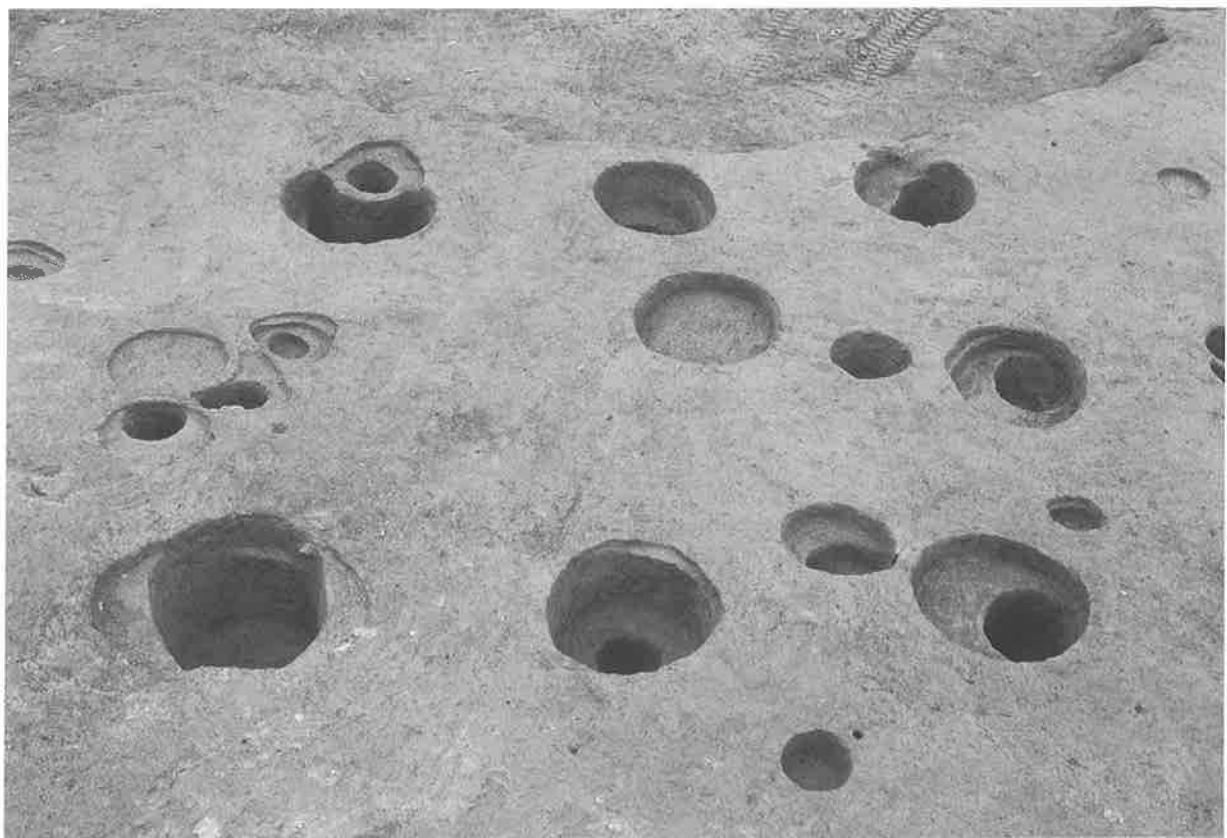


8号掘立柱建物跡（西から）



9号掘立柱建物跡（東から）

図版8



10号掘立柱建物跡（東から）



1号竪穴住居跡（南から）

図版9



2号竪穴住居跡（北から）



1号土壙（東から）

図版10



2号土壤（西から）



3号土壤（西から）

図版11



S D-01土層断面（南から）

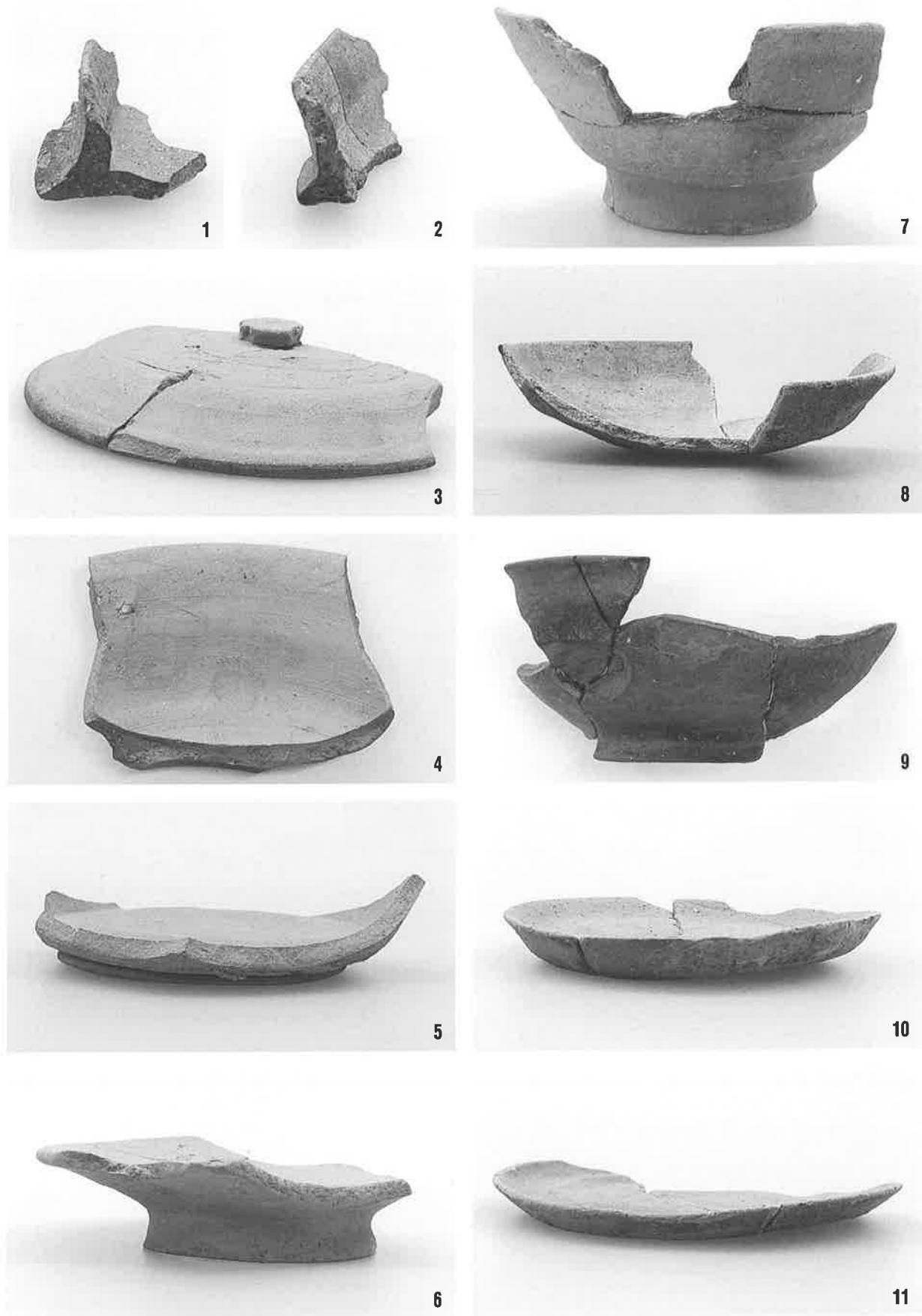


S D-01土層断面（南から）



S D-01 (北から)

図版12



出土遺物・その1

図版13



12



20



13



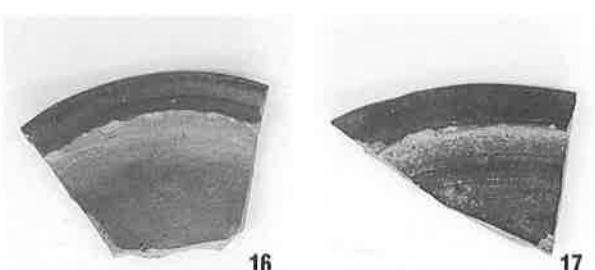
21



15



22



16

17



23



18



23



19

出土遺物・その2

図版14



24



29



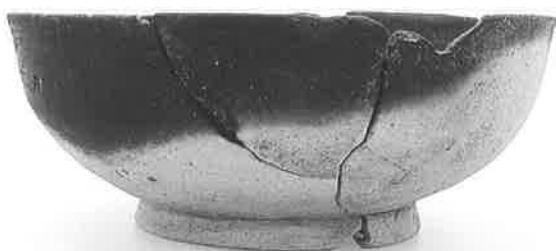
26



30



27



28



31

出土遺物・その3

吉井地区遺跡群III

—柚木田遺跡の調査—

二丈町文化財調査報告書

第32集

平成16年3月31日

発行 二丈町教育委員会

福岡県糸島郡二丈町大字深江1360番地

印刷 大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

